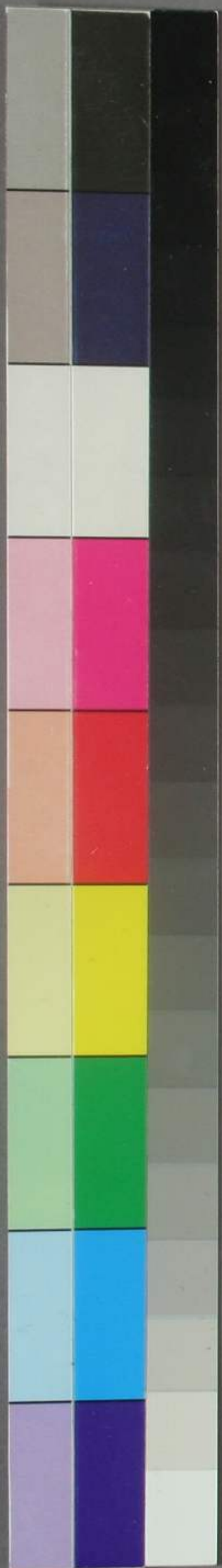


北原白秋歌集

白南風

アルス刊

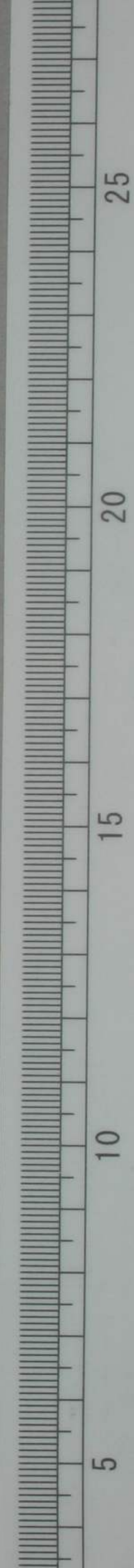
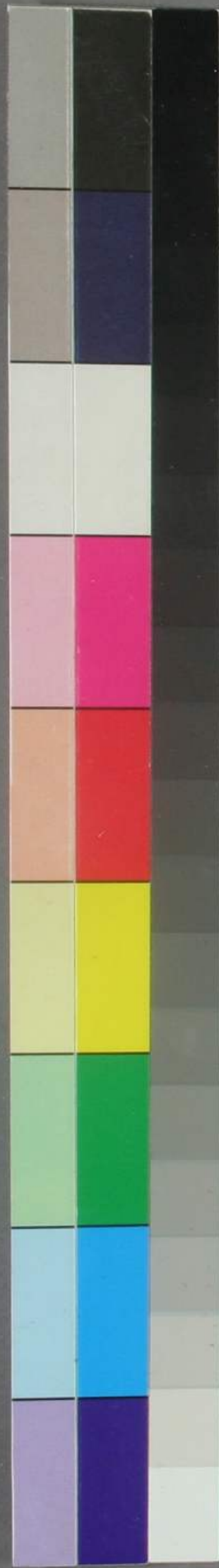


白南風

しらほえ

北原白秋歌集





女子月刊

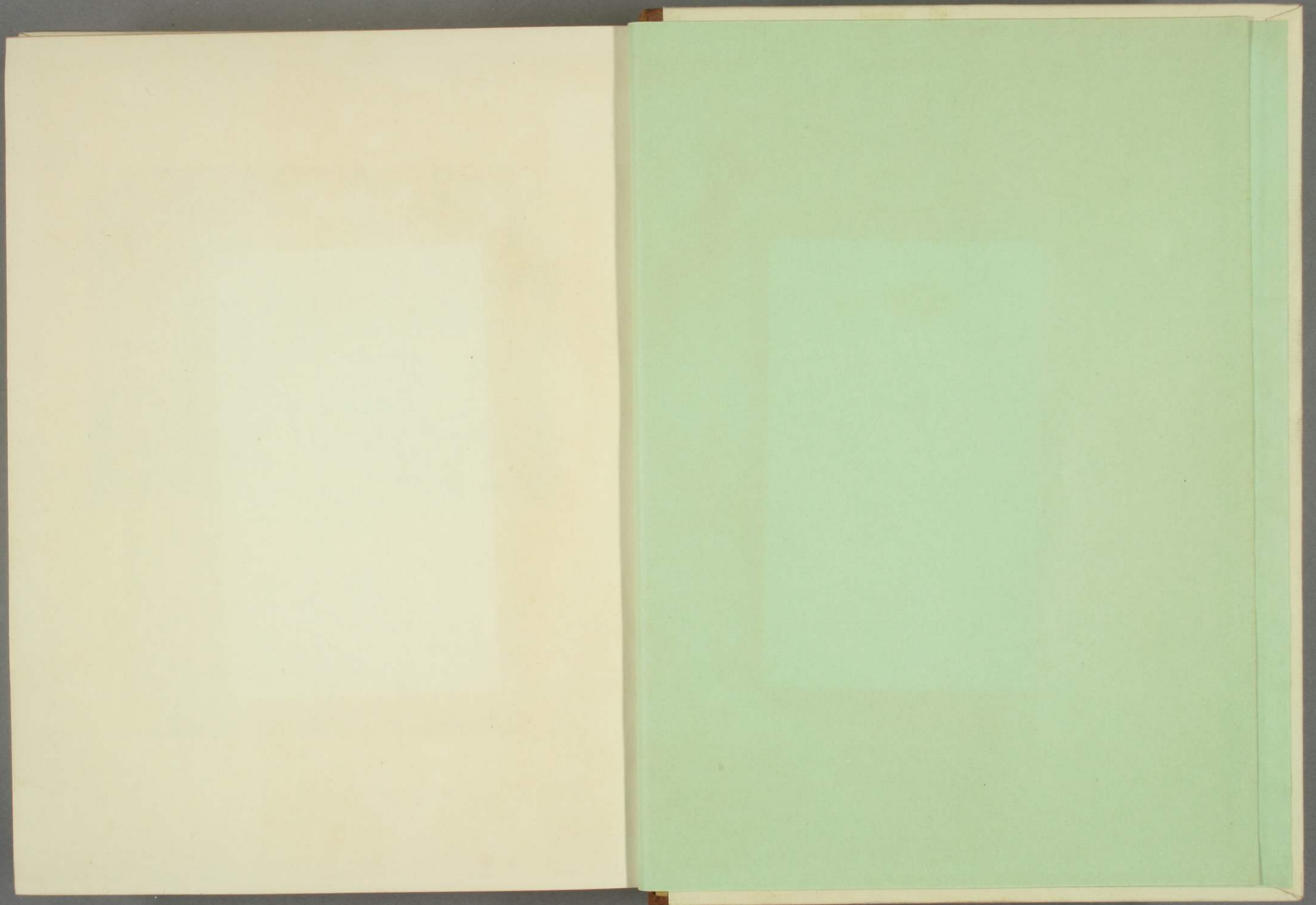
女子月刊社

ARS



清野松樹
抄
卷
五

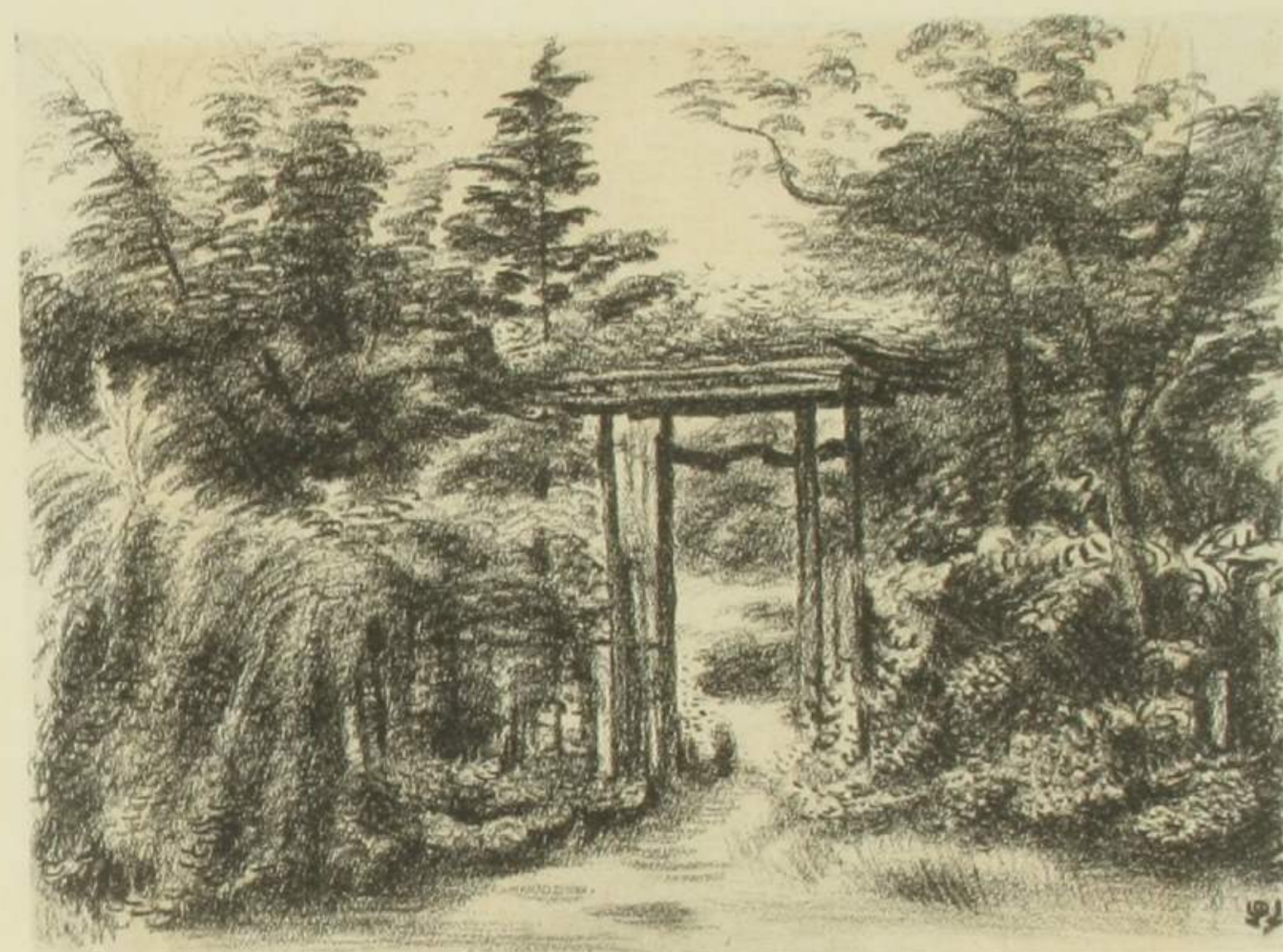
北
原
白
秋



白
南
風

北
原
白
秋
著

A R S



白南風

北原白秋著

A R S



序

白南風は送梅の風なり。白光にして雲霧昂騰し、時によりて些か小雨を雜ゆ。鬱すれども而も既に輝き、陰濕漸くに霽れて、愈に孟夏の青空を望む。その薰蒸するところ暑く、その蕩搖するところ、日に新にして流る。かの白榮と言ひ、白映と作すところのもの是也。蓋し又、此の白映の候に中りて、茲に我が歌興の煙霞と籠るところ多きを以て、採つて題名とす。もとより本集の歌品秋冬に尠く、春夏に多きもその故なり。

我が短歌に念持するところのもの、即ち古來の定型にして、他奇なし。ただ僅かに我が歌調を這個の中に築かむとするのみ。その自然の觀照に於ては、必ずしも名山大澤に之を索めず、居に従ひて選ぶ平々凡々の四圍に過ぎず。又、その生活感情の本とするところに於て、あながちに一時の世相に關せず、社會機構とも強ひて連工する無し。而も又、孤高を潔しとし、流行を斥くるにもあらず。ただ専ら短歌を短歌とし、自然を自然とし、我を亦我とするのみ。

本分は我自ら知るべきなり。

惟ふに風騒いやしくもすべからず。かの光明に參じ、虚實交にして莊嚴の祕密を識る、畢竟は此の我を觀、我を識るなり。一なる生命の根源に貫徹すべきのみ。乃ち、心地清明にして萬象おのづからに透映し、品格整齊して氣韻おのづからに生動せむ。純情にして簡朴なる、幽玄にして富瞻なる、情意臻つて詞華之に順じ、境涯極に入つて象徴の香氣一に鍾る。一首は遂に一首にして亦生死の道なり。質實に

して強靱ならざれば得べからず。

又、惟ふに、神工にして成るものは稀なり。我が如きは、ただに玄微に玄微を搜ね、一音に一音を積み、而も鈍根にして未だ全く達するところを知らず。ただ好むところに殉じ、時に隨ひて行ふのみ。苦樂もと一なり。靈感は安易にして俟つべきにあらず。ただ日常にありて忘れざるべきを思ふ。精鍊の道にして、初めて成就すべき業ならむか。恭謙ならざれば到り難し。

『白南風』一巻、もとより屑々の歌集にして、何らの氣に負ふべきものなし。日光・月色・風塵・草卉・魚鳥の諸相、季節と生活、單にただ一々の歌品を以て、偶ま同好にして渾厚の士の清鑒に供へむとするのみ。言説すべきにあらず。

昭和九年四月

砧村の雲と鐵塔の下にて

白 秋 識

目 次

天王寺墓畔吟

- I・朴はひらく・
 - II・月光佇立・
 - III・こほろぎの髓・
 - IV・冬と緑青・
- 五
三
三
九

緑ヶ丘新唱

- I・ウインネツケ出現・
 - II・月・霧・燈火・
 - III・剝製の栗鼠・
- 一七
一三
一八

世田ヶ谷風塵抄

- I・月に飛ぶ雪・
 - II・春の銃眼・
- 二二
二六

砧村雑唱

- I・白南風・
 - II・氷の鱗・
 - III・夕莢雲・
 - IV・父母の冬・
 - V・月の魚眼・
- 三五
四〇
四五
四五
五九

白南風

しらはえ

口繪 中折(世田ヶ谷時代)
装幀 山本 鼎
北原白秋

天王寺墓畔吟

白雨

大正十五年の、谷中天王寺墓畔に於ける生活に由る。
新舊作合せて、短歌二百五拾貳首、長歌一篇。墓畔吟
なれども必ずしも哀傷せず、世は樂しければなり。

I・朴はひらく

新居

移り来てまだ住みつかず白藤のこの垂り房も
みじかかりけり

厨戸くりやどのとのものの小米ここめ花め闌たけにけり衣干ころもしたり
子らがさごろも

春晝

春まひる眞正まこと面の塔の照りしらむ廻縁ゆかり高うし
てしづかなる土

塔たや五重ごじゆうの端は反さかうつくしき春晝しゆんちゆうにしてうかぶ
白雲

珠数工

音きざむ珠数屋が窓の板びさし椎の古葉のつ
みて久しき

春まひる隣に聴きてひそけさよ珠数みがく子
らが息吹ためつつ

木蘭は花の立枝の影濃くて表おもてにはへりいちじ
ろき照り

木蘭の花立ちひらく春日すらひめもすや人の
珠磨きする

さしなみの隣につづる珠の緒の現うつなりけに春
はかそけさ

墓地前

春過ぎて夏來にけりとおもほゆる大藤棚のながき藤浪

墓地前は石屋が軒をうづみてし白雲木の花もをほりぬ

鶯・鶴・珠鷄

動物園所見

鶯

白鷺はくちばし黝しうつぶくとうしろしみみにそよく冠毛

楨もやや光る葉がひを秀に佇ちて青鷺の群の
なにかけうとさ

鶴

鶴の巢と松の根方に敷く藁は今朝さやさやし
新の麥程

松の花あかる日竝を巢に群れて丹頂の雛は早
やあらはなり

珠鷄

脊に負ひて霞小紋の兩つばさほろほろ鳥は聲
ふくむ鷄

珠鷄たまどりは頬ほの瘤うぶ赤し片寄りにみな横向くとただ
ほろほろに

ほろほろと啼く珠鷄たまどりのこゑきけば夕日ごもり
になりにとらしも

夕かげの砂搔きあますくくみごゑほろほろ鳥とり
の連れうごき来る

門庭

前廂まへふかきこの家を門庭かどは日の照りあかり若
葉かへるで

石のつま濕しづらふ見れば藍微塵あま檀たんの花のちりて
時あり

内庭

若葉して日射明れどこの空や朝より煤すすのきら
ひふりつつ

根ね府ぶ川が石はやいまは日ざしも夏まけて板屋いたやかへ
での若葉映るふ

石いしの面おもてにむらがる羽蟻はなご音立てて香かは時とき経たちし
春蘭しゅんらんの花

庭石ていせきにささとむらがるひとときは柔なき羽蟻はなごも
いきほひにけり

うちあがり羽蟻はなごかがよふ若葉木わかしきの暮合くれあひの空を
いつくしみをる

門前

靄ごめに萌えてうづまくむらわかば墓地の空
こそ照りあかりたれ

日はすでに照りかがやかし若葉木や東に塔の
つまぞ反りたる

墓地の扇骨木

瑞若葉紅の扇骨木は日の照りを躑躅まじらひ
花かとも見ゆ

角吹きてうつら添ひ来る荷かつぎの夕ごゑな
がし扇骨木生垣

父母と

父と母夕安^{ゆふやす}らけく附^つかすなり扇骨^{あふぼね}木もえたつ
墓地の霞を

佛にはかかる和^わをと宣^{のたま}らせこそなどか愛^あしき
光る若葉

若葉陰しみみにまとふ蝶^{かた}子の羽の眼にかゆき
からわれは搔^かくなり

椎はもえ樟^かは闌^かけゆく若葉森この日移りのし
づかなれこそ

石のべの躑躅の蕊^{くさぶた}は長けれど萎^かえつつ垂りぬ
日の光沁み

桐の花曇

義の叔母村上氏、齡七十にも垂んとして、何故にか我が叔父と離別して、今は流浪の身を、この同じ谷中のさる寺に養ふやに傳ふ。ほのかの便なれば、その寺の名すら知るに由なし。幼少の恩愛忘れがたく、暇ある毎にたづねありく。乃ちその歌。

寺おほき山はこの空寺ごとに桐の花咲きて匂
ふこの空

花ふかむ桐の木群こぞのとのぐもりこもれる君が
空もわかなく

山川とをさなかりける我さへやまさしく老い
ぬ人は知らずも

とのぐもり柴こもる桐のはな暮合くれあひの空にけふ
もなりぬる

童と花

朝早やも咲きぬ咲きぬと搔きためて子がかか
へ来る花筒の花

童たらしよこは朝かげの花ならず夕かげに葬はなりみ墓
べの花

いづれよし花は清すがしよ朝花と咲きも咲かずも
露しげき花

新墓

朝なさな求もとめてつつしむ墓の原に新あらた墳つち土つちのい
ろのつゆけさ

あさみどり若葉映らふこの墓や埴のぬめりの
何ぞつやめく

我は誰ぞ筧は曳きつつ新墓の日に殖ゆるすら
朝眼樂しむ

新土に草の香ながれ風疾し何思ふ我のうつく
しみ佇つ

朝東風に

朝東風の吹きひるがへす朴の葉は葉おもてひ
ろくすがしかりけり

吹きはらふ風さき清にこの朝や靄は霽れゆき
て天王寺の塔

この道や朝は葉づたふ木しづくのしづけかり
けり石にひびきて

若葉洩る朝の光は父われの麥稈帽に沁みて子
が手に

子連れれて墓地は若葉の日のひかりしみじみ
と思ふすこやけき息

空しかり死にし幽けき爲すなかり我は世に生
きて繁に喜ぶ

吹きちらふ物みな涼し朝東風や石塔のうへの
藍微塵の花

石のべは三角柏の葉ごもうに蚊の聲ほそし立
ちてゐにけり

よく遇ふ人

夫牽くと墓地をとめぐる朝涼は力張るらし草
分きにけり

草閒来て荒く息づく面がまへブルドグ勢り
手綱張り引く

青春

若葉どき雲形定規かきいだき學生は行く燃ゆ
るその眼眸

若葉森早や鳴き勢ふ春蟬の若やぐ子らは思な
けむか

朴はひらく

朴ハの花白くむらがる夜明がたひむがしの空に
雷カミナリはとどろく

ひむがしに群れてかがよふしろき花朴ハの喬木タカキ
ぞ木立してけれ

生けらくは生くるにしかず朴の木も木キ高く群
れて花ひらくなり

現身アキラカは生きて朝アサ閑まぞすすしけれ愚かなりけり
死シにてむなしさ

光發ヒカリしその清スガしさはかぎりなし朴ハは木キ高く白
き花群ハナ

鳥聲

鳩とんぼ雀つばうぐひすちり矮ちり雞はのこ鷄この朝あ聽きけばいろい
ろの鳥

朝霧あにほろこほろこと啼なくこゑはここの御み寺てら
の鳩とんぼにかもなも

II・月光佇立

梅雨前と

日に黝む紅の扇骨木は梅雨前と刈りそめにけり朝涼夕涼

朴の花落つ

何の木か秀枝しづもる夜目にしてしろくは、さ
らと落つるその花

短夜はいまだ暗きに小嵐や朴の木の梢を揺り
ぬまさしく

下葉うちたたたと石うつ清し花朴の木の花の一
夜落ちつつ

墓石に朴の散花日を経れば縁朽ちにけり一瓣

直土に籠えつつ黄ばむ朴の花晝は仔犬が搔きてゐにけり

石の邊は朴の散花數ふえて梅雨の日癖の雨期に入りにし

櫛の花季

墓原は小雨しめやぐ夜に嗅ぎて吾が堪へがてぬ大葉櫛の花

花櫛の香に立つきけばけんぼなし若葉ふきあかる山戀ひにけり

姥目おばめ 榿かかをす雨夜はつれなくてかしこかりけり
墓地を抜けをり

香かにはすむ榿この木ぐれは夜ごもりに苦木にがきの花
もふけにつらむか

花季はなごきは榿この木ぐれを行きありく餓鬼うけもこそを
れ真夜ふけにけり

椎かかしはむせぶここのらの雨夜あま月つき卵塔たまごはわびし
照りもかへさず

動物園近し

榿かいとどにほふ真闇まやみとなりにけり夜ふけくる
ひたつ鳥獸とりけもののこゑ

浅宵

聲呼ばふ墓地のかかりの夕餉ゆふくとき遊びあかね
 ば子らは愛あなしも

晝のごと青葉かがよふ燈ひのおもて墓地のはひ
 りもここだすずしさ

陸橋りくきょうに灯ひの點つく見れば夜露よるう立ち鶯谷うらやの春も去い
 むめり

電柱でんちゅうの影うちかしく夕月ゆふづき夜切よきり通とほし上のあらく
 さのはな

塔たの端はな月明つきあかりらせしひらら飛とぶ二つ蝙蝠ふぶが金の
 羽はねの裏

月夜の墓畔

墓地前の花屋が花の中なか明あかるみづみづし燈あかりの月の夜に見ゆ

月夜風しろう幅はばだつ墓地わきを影かげはずみ來る
母と子らはも

惟若葉けむる月夜のうつつにも燈あかりとぼす窓か
珠數かがりつつ

隈くまだちて家や廂びさしふかき月の夜もおもての墓地は
照りまさりつつ

探海燈夜空薙ぎゆく墓地の森や女のこゑも月
に立ち來る

深夜の墓地

うしみつと夜のふけゆけば草木みな寝にしづ
むらしまして墓原

月よあはれ立ち蔽ふ雲のいやはてを螢火のご
とも光りけるかなや

我のみや命ありと思ふ人なべて常久に生くる
ものにあらなくに

わづかのみ明る木膚のさるすべり夜は深うし
て笑ひけらしも

黒南風の雲断れにけりこの夜ふけ月ほそく光
り鷺と鶴のこゑ

梧桐の花落つ

眞夜中といよよしづもる夜の空の梧桐のはな
ちりそめにけり

織くのみ月の見え來る短夜をまだ最中なり落
ちしきるもの

朴と弦月

吾が観るは幽世ならず朴の葉に月出で方の黄
の火立なり

ほそき月夜ふけて光るひむがしは雲黒くして
あらはえの風

畫貌

草いきれあつき日なかに汗は滴り無縁の墓の
うつら畫貌

日ざかりは未だし現しきものつやほの肉色
の畫貌のはな

そよろと風過ぎしとき日中の畫貌の花ぞ内ら
見せたる

或る眞畫

石だたみ墓地の十字路の日の関に音とめに
けり落つる榎の實

大佛

うしろ肩大き佛ぞいましける月の光のながれ
たるかも

暮れにけり露佛の螺髪はつくるぐろと月あかりし
てうづだかき肩

月光人のごとし

墓原の木立の奥所おく夜はふかし月の光のたたず
みにけり

物の風か氣けに立ち來らし木の開洩る月の光の
わななきにけり

白秋の墓

我と同じ名の白秋といふ人の墓あり。若目田氏なり。明治十九年没、勤王の志士なり。容貌性格我によく似たるものあるが如し。その婦人菊池氏、我が妻はまた菊子なり。因縁淺からず、ひとごとならず思へば、時をりに行きては墓を清め、花などをささげて、我と亦自ら慰む。

墓の座に鐵砲百合の粉は觸れて日の照はげし
我はぬかづく

命かよふ我かとも思ふ朝じめりこの墓庭の青
苔のいろ

青苔に染みうつくしき斑照りこの木洩れ日は
幾時あらむ

この墓に日ざししづけくなりけりきのふも
來り永く居りにき

日のうち

蒸しつとも現うつならぬかこの墓地の日ざかりを
靄の立ちてあはれさ

日のうちはなにかつやめく物のこゑ墓原ごも
りひびきあるなり

蝶影

墓原や晝の霞の中あがる紋もん白しろ蝶ちょうの翅はねのちらと
輝りたる

眼はあげて吾が附く道のけどほさよ白しろ南みな風の
空をひとつ飛ぶ蝶

双蝶

氣けにふかき蝶のむつみや誰知らぬ墓うらの照
りのすでに久しさ

紙のごとひらひらとこそありにけれ蝶の双たつ
ぞ照り合あへりける

或る新墓

朝は見て息もつきあへずあら墓や力張りきる
鐵砲百合の花

新土あつちは朝にいつくし雨名残いとどしくすがし
鐵砲百合もよし

祭の夜

接待の泡盛は琉球の大壺なり

吾が門の向ひの墓の夕月夜水うたせたるおし
ろいのはな

氣色だち神興練り來るゆふぐれは茅蜩のこゑ
も墓地にとほれり

水うちて月の門邊となりにけり泡盛の甕に柄
杓添へ置く

市中は残る暑さを桎の森や月あかうして向ひ
墓原

墓原や石の角目に照る月の光うち蒼み夜ただ
木しづく

蔓の花

蔓のいろ雨に浮きたり。呼びそめぬ、ラデオ
 のニユース、フラン落ち、巴里暴動す、ポア
 ンカレーまた世に出でむ。子らよよし、冷麥ひやむぎ
 食べむ、實山椒は奴やつにつけむ、月待ちがてら。

残暑

墓原の木立に暑き蟬のこゑじんじんとときこえ
 今日も久しき

この暑さまだし堪ふべし色褪せて蔓あぢさゐ
 はほろほろの花

日のほてりはげしけれども石の閒や細葉のつ
 つじ株さびにけり

羽蟲

墓地の十字路にて

夜目ながら老木の榎洩る月のしろがねの網に
 狂ふものあり

百日紅咲く

展望

朝はすすしき
百日紅花いち早し眼はやりて向ひの墓地の今

風かよふ百日紅の花見れば立秋のけはひ既に
うごけり

中垣

對ひ葉の枝の秀ごとの紅き花百日紅のちらら
咲き繼ぐ

門庭をこなたへ咲きて中垣に影ちらつかす百
日紅の花

つくつくはふしひとつ来てゐる夕つかた袖垣
のうへの百日紅の花

墓地

百日紅咲きつぐ道は吾が行きて利玄分骨の墓
も涼しさ

百日紅下照る道の石だたみ子とひろひつつ蚊
のこゑ暑し

百日紅滑ら木肌のこぼれ日は花咲き足らひい
とどしき揺れ

花あかき百日紅ひゃくじつこうの下にして子が立ちとまる影
のみじかさ

白秋の墓にて

この墓をすがしと思へば差出さしだ咲く向ひの墓の
百日紅ひゃくじつこうのはな

本ほんごころさびしき時はここに來てしじ聴きに
けりつくつくはふしのこゑ

彼岸前夜

花つみて一荷ひとにはのぼる馬ぐるま寛永寺坂に月
は照りつつ

この月に佇む馬の尻向けて花屋が前は露しと
どなり

入り廣き墓地のまともの宵月夜風とほじろし
早き葉はちり

墓むらや月の光のながるればこちごちの石の
濡れてはろけさ

月晝のごとし

本阿彌の露地出でて來れば狹霧立ち月晝のご
とし墓の草原

芒の穂に小蓼ひるがほをみなへし遊び歩かな
月夜よろしみ

秋雨の朝

雨のあし秋づきぬらし椎の葉の前には見えて
 ここだみじかき

塗りづくゑ今朝ひえびえしペン軸に螿螂かまきりの眼
 はたたかれにけり

秋の夜書齋にて

髓すね立ててこほろぎあゆむ疊には砂糖のこなも
 灯ひに光り沁む

秋の夜は前の書棚の素硝子に煙草火赤し我が
 映るなり

塔影

目に黒く木末かがよふ星月夜御院殿坂をひた
ぶるのぼる

雨たもつ椎の木すゑの土用芽のかすかに星に
光るならむか

小夜中は五重の塔のはしはしに影澄みにけり
小糠星屑

金輪際夜闇に根生ふ姿なり五重の塔は立てり
けるかも

立てりけり星屑たぎる夜のくだち五重の塔は
影くきやかに

青あざのつまあぶ朱あかの五重ごじゆうの塔たかの今いま眞まこと闇くらなり驚おどろのしき
啼なき

星月夜九輪の塔の空たかくうち透かし見れば
かよふすぢ雲

朝露

朝顔にまじるみどりのかもじぐさここらの墓
の陰かげもうれしき

このあした露おびただしむきむきを穂に搔き
垂れてゆらら犬蓼

この墓やゑのころぐさの穂は濡れてえんまこ
ほろぎも露まみれなり

秋ぐさ

花に遊ぶ

うゑませてしをりよろしき秋ぐさの花のさか
りを見て遊ぶなり

曼珠沙華了る

曼珠沙華莖立しろくなりけりこの花むらも
久しかりにし

彼岸ばな今はおどろと巻鬚の朱もしらけたり
長雨ふりにし

月夜の庭

よちよちと立ちあゆむ子が白の帽月のひかり
を揺りこぼしつつ

木蘭キランの濃き影見れば良夜あたらよや月のひかりは庭に
あかりぬ

竹柏チキヒクの葉と木蘭キランの葉の影交し月は隣の家の上
に來ぬ

家竝イナナヒの高きアンテナ月の夜は光りまさりぬ濡
れにけらしも

照る月の夜空にまよふあるかなき薄翅うすはねかげろ
ふの尾は引きにけり

深更月夜

板縁は月夜ふけつつ
 玻璃のかげ引きてゐにけ
 り光る幾線

總玻璃のとのもの月夜ふけにけりし
 ろくかび
 ろく庭石は見ゆ

石の面に月の光は冷えてはてて音
 ひとつ無した
 だにその影

月夜ふかし光しづもる木々の
 間に羽蟲かと思
 ふ影のちらつく

裏うがつ月の光となり
 にけり黝き茂みのゆづ
 り葉の垂り

櫨紅葉

一木櫨いよよ照葉のことごとくに染み出来にけり
 櫨はその葉に

観つつあれば櫨の紅葉の一ひらちりまた二葉
 ちりぬ日の照る石に

石のべの櫨の落葉はよく掃きてまた眺め居り
 散りてたまるを

櫨紅葉下照る土はしめやぎて帚目正しちる二
 葉三葉

はらら散る櫨は落葉ぞおもしろき表火のごと
 く裏へ寂びたる

石のべに楡の落葉を吹きためてはららきし風
も止みゐたりける

紅葉に籠る

立襖は金泥をちらし、桔梗・薄・女郎花
などを肉筆にて描きたり。

立襖たてぶすまもみちにあかる夕ゆふの閑まを籠らふふかき日
ざしなりける

初冬の庭

色鳥

菩提樹の落つる葉早し尾を曳きてめづらにつ
どふ色鳥の影

刈りこみて

吾庭はみ冬ちかきに刈りこみて躑躅のほそり
目に立ちにけり

空寒し今は葉も無き菩提樹の木膚かぐるく伐
口のいろ

落葉のあと

ひえびえし冬の日ざしとなり
にける土に落葉
の光れる見れば

かへるでの枝こまごまとあり
にけり葉なみふ
るひて今はしづけさ

冬の椎

まれまれに椎の葉にもつたまり
日も照りはか
へさず冷えまさるらし

椎の葉に冬の日のあるほどほど
はうれしき珠
数の珠も磨るなり

氷雨の頃

錦木の時雨紅葉となり
にけりふりみふらすみ
日にくすみつつ

冬^{ゆき}青^{あお}の葉に走る氷^ひ雨^{こぼれ}の音^ね聴^きけば日^ひのく^くれ^れぐ^れ
はよく弾^たく^くなり

冬に入る菊

目にたちて菊は白けど置く霜のむらさきの凍^{しも}
み光こもれり

菊の香のこもりてぬくき冬日向蒲團の綿はゆ
たにうちつつ

冬日向

墓原の空地ちちに繁さかきゑのこぐさ子こら踏ふみ荒あらし
地ち膚はだすら出でつ

墓地裏つとも集あふ子供この影かげさむき冬ふゆの薄うす日ひの照あり
となりなりにき

墓地裏つとに騒さわぐ子供このこゑこゑきけばおほおほにあらめり
爰こゝかも來きむ

冬木

朝あしあぐれ塔たの庇ひのあをあをと木立きだははづれに見
えて寒さけさ

向う墓地冬木したしくなり
にけりこちごちの
靄は落葉焚くなり

上光るけだし榎の乾葉ならむ
こまごまと溝を
ふりうづめたる

凍土になにか落葉の二葉三葉朝
早き風にそそ
走りつつ

冬の夜の雨

冬の雨の石にひびかふ墓地の闇母と来る子は
歩みとどめす

墓原を歸り来る子のこゑきけば氷雨すさまじ
くふり亂るらし

をさな兒は軍歌うたひていさぎよし外套に靴
に氷雨はじき來る

寒月

枯枝に白銀かがる月の夜は光ほそうして互え
にけるかな

霜の庭隈

霜の凍みいたもきびしき土のうへに南天の紅
葉はらら散りたる

柿の實黝すむ觀れば袖垣の結ひ目も凍みぬ霜
の氣に立ち

霜と南天

墓原の花すてどころ霜ふかしつくづくと今朝
は我もきびしき

霜ふかき花すてどころ目につきて南天の實は
鈴の赤玉

山茶花咲く

山茶花の最寄りの日向しづけてたまたま來
れば子らつどひけり

童^{わらわ}どち足踏しつつまだ小^ちさし山茶花あかく咲
きにけるかな

朴の實凝る

たかだかと冬木の朱實垂りにけりきびしくも
凍むか向ひ墓原

寒の霨

暮の霨子が背囊の毛に凍みてしろく粒だつ寒
到りけり

冬木原寒の霨ごもり行き消ゆる人あし見れば
暮せまりつつ

暮れぎはの寒の霨かかる冬木原外套あかき子
も來るなり

冬すでに頬のみ燃え立つ雄の雉子の駆け走る
見れば日もつまりけり

縁 先

石のべの紫蘭の英こぼに来て光る蜻蛉かげろふの翅はねも小ちさ
うなりにけり

白秋の墓にて一首

この墓かぶに凍しもみつつ白しろき山茶花さんぢあなの蕊しほあざやけき
寒かぜは来きりぬ

墓原かぶらの遅おそき月夜つきよの石いしだたみ山茶花さんぢあなちらし止とどむ
旋風つひじあり

或る朝

今朝も見る 閼伽の氷のさやけて子はたたき
ゆく墓石ごとに

山茶花は末もつばめど濃き紅の上凍くろしつ
ひに開かず

雪

もんもりと雪ふりつもの朝まだき知音の墓は
求めて親しさ

雪は観て早き朝餐をたおたおと木ぶりをかし
く揺り出しづけさ

薄墨とけぶる低めの空にしてよにしづけきは
 百日紅さるすべりの雪

人踏みし雪の窪みに聲はしてなにかひもじき
 雀入りをり

さるすべり枝のぬめりにつむ雪の時しづれす
 る聲のみしろし

雪に

むらさきのこもりしたしくなりにけり見ての
 みか居らむ薄き障子を

雪あかり早やすべしなし張りつよき白き障子
 に燈は向けてあらむ

霜とラヂオ

大君の御腦のニユースきこえ來ぬ絶えて音なき霜夜しづもり

霜の凝り堪へてこの夜もすわりたりラヂオのニユース聲せまりたり

霜くだる今宵のラヂオおぎろなし心とどろくひと時隔きに

霜の夜のラヂオのニユースはてにけり灯は明うしていたくしづけさ

縁の戸にひびく霜夜の玻璃の罅ひたなげき寝ず御寶我は

大君は神にしませばこの霜のとほる夜ふけは
 聴きておはさむ

大正天皇を悼み奉る歌

冷^ひえとほるほどの霜や冬^{ふゆ}青^{あお}の葉の垂り葉の
 光^{ひかり}ゆらぎ止^やみたる

現^{いま}神^{かみ}天皇^{すめらみこと}にましましてなほし常^{とこ}無く坐^ますがか
 しこさ

あらたまの年立ちかへる日は見えて神あがり
 ましぬ霜のしろきに

健^{すこ}けく常^{とこ}は坐^まさずも大^{おほ}御^み命^{いのち}長く坐^ませよと仰^{おほせ}ぎ
 しものを

ほがらけき崇きたふとき大御業つがせたまひ
き短かかりにき

石の面にいやさむざむと日はかげりたづき知
らずも生ける蟻匂ふ

冬木の根に凍む土の張り乾きかうかうと響く
道を行くなり

梅もどき

天王寺歌會即興、録二首

梅もどき籠に挿しつつ用は無し來馴れし人の
來れば待つなり

吾妹子が挿してうれしき落霜紅オンスコツブ
のくちばしよしも

或る母と子

寒夜、日暮里驛のベンチに相抱きて曉に發つ汽車を待つ
母と十一二の女の兒ありき。子は雛妓の見習に上京中、
肺患のため母の迎ひを受け歸郷せんとするなり。あはれ
なれば家に伴ひ一夜を送らしむ。後その子死にたる由の
報知來る。

母と子のおもざし見れば寒き燈にすべなしば
たたきよく似たりけり

吹きさらしひびく霜夜にかきいだき母と子は
ありき温みとるとて

女童は繁に咳き入る寒き夜を小糠小星も風に
匠えにき

ただにありき爐の火かきおこし寒むからむ温
もりてよく寝よとのみわれは

死にせりと母が書き來し文見ればその子が笑
ひ力なかりし

墓原に風は吼えながら朝わたる月夜なりしか
白みそめにき

子にくるむ衾そだたき一夜いねすたづきなか
りけむか人の親母は

失火多し

この夜ごろ火に立ち騒ぎ止む閒なしかぎりな
く寒く人はまづしさ

すさまじき夜の火なりしか墓地ぬけて曉の霜
に身ぶるふ今は

霜しもいたり空そらは濃こ青あざき夜よの明あけに筑つく波なみの山やまはく
きやかに見みつ

冬晴

柿かきの帯おビ黒くろくここれる枝えだ見みればみ冬ふゆはいたも晴は
つゞくらし

春曇籠居

深ふか廂びさし晝ひるもをぐらき家いへの内うちに灯あかりはとぼししつつ春はる
を待まちつわれは

とのぐもりぐもり煤すすの氣けふかく立たち舞まへば咽のど喉どゑご
くして春はるもくるししさ

緑ヶ丘新唱

124

春ひらく

何か花にほふ雨あま閒まの木このくれを妻つまとし歩あひくゆ
ゑはしらすも

昭和二年の晩春より同三年の初夏に至る馬込緑ヶ丘の生活に由る。新らしき文化住宅地緑ヶ丘の突端にある此の馬込の新居は、明朗にして簡素、月霧燈火の夜景は亦九十九谷の名にそむかず、少くとも近代詩趣の一年なり。

I・ウインネッケ出現

新居

吾が門は通草咲つぎ質素なり日にけに透る
童らがこゑ

厨戸は夏いち早し水かけて雫したたる蝦蛄の
ひと籠

玄關

この小さき鐘と撞木は前の主人の遺し置けるものなり

小さき鐘撞木とりそへ吊したりこの家のはひ
りすがしとも見よ

小さき鐘掛けてすがしきこのはひり戸は鎖し
にけりそよぐ木の影

風そよぐヒマラヤ杉の二三本はひりの庭は今
朝もすすしさ

吾が童鐘にとどかず脚立よりのびあがりうつ
面仰向けて

小 閑

戀しかる晝は待てともうつ鐘のまたわづらは
し人にこそよれ

誰待つと家居るならずおなじくも憂ふる人の
来よと思ふのみ

まれびとか或は来けらし軒鐘や音のさやかに
ふたつ鳴りたり

あやめ咲く

家垣の築土のあやめ咲きにけり童な手折り通
りすがりを

あやめ咲く築土に添へば鴨跣草や隣もすすし
ふり亂る露

夕風

蝶子の立口にかゆきか吾が童夕ばえの頃は聲
はずむめり

月はあれど夕立つ雲の氣に見えてなにか逸れ
たる蒸しかへしなり

晝 貌

日に 闌たくる草の香 嗅かげばこの崖や晝貌の 咲く
色もまじれり。

晝貌は晝もあはれや容み貌め清き稚わかどちゐて草に
坐まりぬ

出 現

二人の子供は隆太郎と篁子なり

草くさ生ぶには出で入る子らが二人ゐて晝ふかきか
なや大き星見ゆ

月のごと大き星晝の空にありウインネッケよあは
れ人は貧しさ

木の花咲く

うち開くわが屋は高しゆりの木のほづえに花
も現れにけり

大き鳶たわたわと来て過ぎるとき穂にあざや
けき丹波栗の花

隆太郎

大き窓今朝うちひらき朗らなり芝の刈生に子
は飛び下りる

白き柵をどり越え来てわが太郎窓這ひあがる
この朝づく日

卵

梅雨^{つゆ}ふかし薄^{うす}ごもりに生^なみためて鶏^{けい}の卵^{たまご}の光^{ひかり}
澤^{さわ}も失^{うしな}せぬる

卵^{たまご}ひとつ生^なますあはれと見^みつつあし生^なみてあ
りけり鶏^{けい}は草^{くさ}生^なに

送梅

半^な夏^げ生^な早^{はや}や近^{ちか}からし桐^{とう}の葉^はに今朝^{けさ}ひびく雨^{あめ}を
二^に階^{かい}にて聽^きく

しやしやと來^きて篠^{しの}懸^かの葉^はをひるがへす青^{あお}水^{みづ}無^な
月^{つき}の雨^{あめ}ぞ此^{こゝ}の雨^{あめ}

斷層

斷層の青萱見れば吹きなびく風竝しるしかが
やきにけり

やや黄なる風景

梧桐のふふめる花の穂に立てば二階も暑し意
は開け置く

日は午なり靄たちこむる向う空にカキ色の氣
球熱しきりたる

午の坂黄なるドレスのぼりゐて電柱の影が
彎みたり見ゆ

架橋風景

憤怒堪へつつのぼる我が歩み陸橋にかかり夏の富士見ゆ

陽炎の揺りあふる見れば朱の桁や鐵橋はいまだ架けたへずけり

かうかうと鐵の鉦うつ子ら見れば朱の鐵橋は雲に響けり

蒸す雲の立雲思へば息の緒に息こらへ立つ憤怒の神

こまごまと菜萸の鈴花砂利に散りあはれなるかなや照りのはげしさ

吾家の坂

日は著しのほり險しき坂なかば築石垣のこほ
ろぎのこゑ

白菜の暑き日での竹煮ぐさ粉にふきいでて
いきれぬるかも

盆地の蛙

馬込盆地の暑き小峽にうちひびき蛙は啼けり
草いきれ立ち

聲合す草田のかはづ晝闌けて閉を啼きしぶれ
深むものあり

千
椋

未つひに人の命は長からじ眼には笑みつつ肩
喘ぎけり

水さしに水はあらぬをほそぼそと吸ひほけに
けり透きとほるもの

かくしつっ人の命は過ぎなむやちかぢかと眼
を寄せて見むとす

眼力まなぢかかくのごとくば眞夏まなげさらずあはれほそぼ
そと人は死にせむ

山なすここの書まほこりつもり暑き日なか
を息継げり君は

生きざらむ命思はず仰ぎ寝て手は拱みにけり
敢て息繼ぎ

下冷えて額ににじむ薄ら汗おもほえばしじに
君も生きにき

二階に咳ひびきけりかいかがみ今はすべしな
し靴の紐むすぶ

おもての光くわうくわうと流れたり強ひてま
ともに眼は向けて出つ

いたいたし脚のほそりの眼をさらす我は踏み
ありく光る直土

眞夏過ぎ簾うごかす廂合の朝の涼かさを君は
たのめぬ

百合木と猫

うちそよぎ風吹きかよふゆりの葉に朝は朝日
の透きてすすしさ

廣き葉の半は黄なる本つ枝に早や風涼しうち
かがむ猫

夏野

ひとすぢに夏野よこざる道しろしおのづから
なる歩みつづけむ

道のべの車前草硬くなりけり眞日明うして
群るる子鴉

風に観る

風ひびく葉は廣ひろ篠しの懸か諸もろ枝え立ちあざやけきさ青をの
火は立た騰たかれり

ボブラ葉のかがよふ見れば涼風立ちさながら
に日の光るさざなみ

吹く風の幅は揉みぬく栗の葉の葉あひに青く
毳かの群れたる

永瀬夫人を弔す

夕かげのおもてに移る合歡の花ほのかに君も
ねむりたまひぬ

赤松

いとどしき残暑の照りとなり
にける繁立ほそ
きその赤松に

赤松の直立つ見ればあきらけく正面の西日木
膚照らせり

夕かげはにほひこめつつ露ごめに疊みよろし
き松が枝の笠

赤松の一木が撓る向う丘夕かげの中に風の吹
きしく

夕早く風にさはめく赤松の林のほそみ見るが
すすしさ

洗足の池

み寺には百日紅の閑しづかなり洗足の池の夏も過
ぎたる

池のべの楊やなぎが傍そばに咲きあかる漆うるしの花はまだあ
はれなり

現いま世よの漆うるしの花のひと木立藤ふじたくしろき月空に
あり

みなぎらふ夏の光も過ぎにけりわが對あふ池の
薄らささなみ

残暑の日ざし冷ひやめ來きるさざら波なみただひとりな
る舟は遣やるなり

九月中旬の或る朝

竹煮草今は穂に垂りしづかなり
鴉茶の莢の朱
のいろの液

隣りびと W. Timaeus の厨には意はうち開きフラ
イバンが見ゆ

露つけて今朝すばらしく眞青なりうしのしつ
べいの放射線の芒

露草は朝露しげし今朝咲きて涼しかるらし黄
の小蕊立ち

松の木閉栗の花ぶさ返り咲き日光室に日の光
る見ゆ

朝霧

朝めざめ清にすがしき戸は開けてヒマラヤ杉
は大粒の霧

吾が起きてただに瞰下す門の戸を濃霧しづも
り谷地はこもりぬ

森と言へば叢立つ霧のこちごちに氣高く厚く
壘立てたる

朝月夜いまだも夜霧とどこほりひむがしの丘
に日あし立ちたる

高き屋に光射し満つ我が丘を明暗の谷の街ぞ
とどろく

月とヒマラヤ杉

窓ちかきヒマラヤ杉の秀^はは揺れて光り來にけ
り月出づる方

わが門^{かど}はヒマラヤ杉の朝月夜影がそよげり鋪^{しき}
石^{いし}のうへに

II・月・霧・燈火

谷の馬込

馬込は谷おほき里、とりよるふ丘の岬々、朝
 に夜に狭霧立ち立つ。高窓や東に開き、西を
 あけ、南もあけて、うち透かす賑ふ灯、山中
 のみ湯のさまかも、月さへも紫明る。霧はお
 もしろ。

篁子

女童が唾毛にやどる露のたま月のありかは雲
 の上にして

木の閒洩る谷地の灯あしの線引きて蛙が啼け
 ば子は寝ぬるもの

月に佇つもの

ひとり行く

ひとり行く歩みとどめて眺めけり水芋の葉に
月の宿れる

おのづから歩みはとまる道すがら芋の立葉の
ことごとこの露

美童に遇ふ

月を指す幼兒ゆゑにあはれとはいみじかりけ
ることを言ひつる

珠たまのごと露つゆの立たち葉はに月つきは照あり清きき童わらわの面おもてあ
て佇たつ

犬いぬの吠ほえ近ちかき月つき夜よの野の路ぢの霧きり誰たれかころろと歩あみ
かへしつ

清きらけき母ははを思おもへば月つきの面おもてに微こ塵ちの氷こ吹ふきつ
くる影かげ

白しろ鷺さぎの月つきに見みえつつ飛とぶ影かげは正ただ眼めながらに霧きり
しまきつつ

夜、風に思ふ

母ははを思おもふ現うつの聲こゑや夜よ風かぜの硝すず子こ戸かどたたき消きゆる
疾はや足あし

秋ちかき

秋ちかき月の夜ごろは雲と言へばしろく流れ
て片明りつつ

涼しさははてなかるらし眞木山や隣る月夜の
小竹の葉にして

庭隈

影いくつ涼し月夜や古木の梅つつじ藤錦木ほ
そき孟宗

梨の棚あをきすはえに照る月の光しづもり鳥
屋の戸も見ゆ

或る月の夜

草ごもるかけろ探すと子らは出て月にわけを
り薄き月夜に

搔きわけて涼しきものは簞たなの秀はや月の夜ごろ
の山いもの花

簞たなの葉に月の光は遊べども吾が利心とこころよいまだ
和なます

咲くものはつひにあはれよ月夜つくとよ照り山いもの
蔓にそよぐ涼風

おもしろの月の夜ごろや草に居て眼に入る物
の風そよぐなり

夕月映

かぎろひの夕月映の下びにはすでに暮れたる
木の群が見ゆ

月の照り匂だち來る雲ながら木原が上は色の
さむけさ

月の映こもりてしろき夜の靄に煙かと思ふ色
ぞうごける

遠じろくうごくけむりのふたながれ月の光も
渡りつつあり

ひと時は夕月映にめづらしき遠近の谷の早き
燈火

紫の月

馬込は霧多ければ圓月もまた紫に見ゆることあり、
光悦の屏風と思ひ合せて

中明^{なかあき}る紫の月丘にあり秋ぐさの花の亂れたる
かも

桔梗^{ききやう}の月にさやけき松が根はひとりかがむに
しくものぞなき

遅き夜二景

洩れいづる月の斜光となりにけり雨は盆地の
灯^{あかり}をたたきつつ

匂^{におい}だち濕^{しめ}らふ雲の影見れば小夜ふけと月もふ
けて和^なぎなむ

月のあなた

はるばるとわたる月夜のうろこ雲現しき母の
子をかかへ佇つ

月夜よし遠き梢に下り疊む白木綿雲は雪のご
と見ゆ

月夜俯瞰

月高し谷地の夜霧に尖り出て急勾配の濃小豆
の屋根

しゆうしゆうと夜霧ながれてありにけり月に
光るは玻璃の屋根のみ

月夜靜坐

二階の和室にて

硝子窓月に開きて坐りけりつくゑにうつる壺
と筆の影

筆立のとりどりの影しづかなり月夜ふけつつ
ひとり坐るに

塵ひとつ月に留めじと思ふなり黝朱の塗の清
の文机ふくま

ふけつくし月の騒ぎも過ぎにけり梧桐の葉に
今は澄みたる

つくづくと観る月ならし夜の遅き光に妻が面
向けたる

さる樂人

目は盲^しひて笑^まかすかにおはすなり月のひかり
の照らす面白^じ

III・剝製の栗鼠

草の穂

秋さびしもののもしきひと本の野稗の垂穂瓶にさした
 ば 秋の空ふかみゆくらし瓶にさす草稗の穂のさびたる見れ
 同 千 椗

秋ふけぬ物の葉すゑに立つ 螟子のかそけき光
 ただに思はむ

稗草の穂向にちらふ 螟子のかげ驚きて思ふう
 らさびにけり

さびさびて今は光らぬ野稗の穂親しかりにし
 人も死にせり

野稗の穂瓶にさしつ つうらさぶしかくのごと
 くや人の坐りし

吾が門は電柱の根に夕日さしうらがれぐさの
穂が映るなり

§

草の穂に移ろひはやき日のあたりこのごろは
われも病みやすくして

観艦式の日

家にこもりて

皇禮砲とどろと響き雨間なり柿のみちがう
つくしく見ゆ

航空船黄にかび来てとどろけりなにかはさ
むき日の曇りなり

はらら飛ぶ小禽あはれと観つつゐて霜の葉お
ほき木々に驚く

とのぐもり羽ばたきとよむ飛行機は向ふ時雨
に今は列竝む

菊

吾が庭は白き小菊の錢菊のただに明りて朝の
濃き霜

菊の花酔にひたしつつうらさぶしかくしつ
こそ秋も過ぎなむ

白菊の青み互え來る夜の寒き百燭のあかり近
く寄せ置く

子を呼ぶ

御會式の萬燈あかく山を去り蹤きゆける太郎
この夜歸らず

子を呼べばまばたきすもよこの夜さり谷地の
灯あしが暈毛なし見ゆ

父われの大き靴はき童なり萬燈に蹤きていづ
ち向き行く

わが聴くは小さき足音ひとつのみ夜は暗くし
て群の足音

灯は多しとも大きくみづみづし紫の燭は映
畫館ならむ

錦木の秋

吾が庭は若木錦木もみぢして椎の根方も照りとほり見ゆ

時雨のころ

光無き冬の入日の朱のおぼろ西の曇りのあやにしづけさ

神無月合歡わの老木おきなのもみぢ葉はのすでにわびしく濡れわたるめり

朝にけに時雨なづさふ雑木立最も寄よりの丘かみも染しみて來きにける

短日

十方に放つ黄金の日あしなり
 樺の寒き冬の木
 のうへ

群禽の木末にきほふひと
 なだれ遠のながめも
 寂びあまりけり

み冬づく丘の家居に立つけぶり
 湯氣おほけれ
 やあたたかく見ゆ

目にたのむ寒き木の間の赤屋根も
 煙見せつつ
 いつか暮れたり

暮れにけり師走の谷地の家びさしに
 こごりて
 白き寒靄のいろ

落葉の庭

こま形かたの銀杏いんぎよの散葉ちりば黄きに互さえてその向き向き
を霜のよろしさ

土つちに凍こみて今朝けさの落葉ちりばはおびただし木履きんぎょつ
かけそこから掃はきある

黄きなる葉はと褐かき色いろの葉はとちりにけり黄きなる銀杏いんぎよ
がまれにこまかさ

枯かれつつし色いろに目めだたぬ雜木ざいぼくやま向まひは霜しもの
晴はれにたるらし

立たちほそり寒かき木きゆゑに裸木はだかきや霜朝しもあさの空そらに末
光ひかりるなり

坂下

冬の日の光^ま返^まえたつ浅葱^{あさあじ}は添^まひゆく子^こらの頬^ほに映^{うつ}るらし

ほろほろと行くにくづるる崖^{がき}の土^{つち}こごりきびしき霜^{しも}ぞ立ちたる

霜ばしら

男^{おとこ}の童^{わらわ}父^{ちち}の杖^{つゑ}とり犇^{せむ}とうつ霜^{しも}柱^{しら}しろし此^{こゝ}の霜^{しも}ばしら

こごり立ちしづけかりしかひた乾^{かわ}く地^ち膚^{はだ}はららかし踏^ふむ霜^{しも}ばしら

砧
村

隆太郎を砧村の成城學園に入學せしむべく、先づ行きて
參觀す。

濃き霜の凍みてさやけき冬菜畑に朝の響の來
つつしづけさ

霜いたる冬の玉菜は蕪しべにきびしく結ひぬ
その株ごとに

朝凍の大野の霜となりにけり早やあざやかに
冬菜積みたる

清々に根引く冬菜は野に積みて置き足らはし
ぬ横山のごと

水のべに洗ふ大根をさわさわに見つつわが行
くしろき大根を

み冬づくくぬぎ林に子らと来て落葉踏みたつ
る音のひもじさ

くぬぎ原ぬけつつとほる貸家の庭霜くづれ黒
し落葉まじり踏む

子を負ひて切通しゆく影寒しこのあたり低き
雑木ひと山

妹の家

風後の冬の日あしにけり通草の散葉い
まだ青きに

このとぼそ晝も鎖しつ々寒けさよ日は光りつ
つ一木白樺

風すさぶ一木白樺月夜には影いさぎよし葉竝
ふるひぬ

牧 舎

草くづと土糞焚きつぐこの日ぐれ五六頭は居
らし牛の立ちつつ

寒 夜

寒の月響く夜空となりにけりしろき梢の繁み
立つ仰げば

冬木照る月夜すがらやまれまれば山片附きて
走る電あり

白き野菜

白くのみ月にかがやくひと東は紫うすき根の
蓮らし

白菜はみながら白し月の夜と霜の光にうづだ
かく積む

白き菜と紫うすき根の蓮冬はさやかに厨戸に
あり

鳩

唐畫風

白菜の霜にかがよふ夜明け方歩き歩きて鳩は
眼聰さ

寒 曉

しらしらと朝行く鷺の影見れば高くは飛ばす
寒き水の田

下り盡す一夜の霜やこの曉をほろんちよちよ
ちよと澄む鳥のこゑ

水 禽

かげ寒き池の水面やつれづれと家鴨およげり
鴛鴦を前に

尻あげて水に竝みゆく水禽のちらら後搔くふ
りの寒けさ

冬の道路

畑なぞへ冬の砂利道行きのぼる柚子色の帽は
悲しきごとし

夕凍^{ゆふこ}にむらさきしきぶ^な数^{かず}光り電線は切れて橋
に垂れたり

冬の土

冬の道くだりてのぼる木原山射的の音がひど
く確かさ

冬の土ひた乾くから小胸^{せう}張りかうかうと行く
小學生なり

剝製の栗鼠

とまり木にからみて朱き烏瓜毛は荒しもよ剝
製の栗鼠

頤ひげをくひ反らしつつ愚かなり剝製の栗鼠
を氷雨にぞ置く

冬ちかき一望の寂映りゐる剝製の栗鼠の大き
眼の玻璃

寂しくも遊ぶ暇は無き我を剝製の栗鼠はしづ
けくあるらし

秋冬を心むなしき夕ながめ剝製の栗鼠は眼の
光るあはれ

寒空

いつまでか長き日あしぞ炎立ち冬木にたぎる
寒空のいろ

寒の土に佇ちつくしつかそけさよ冬は螢も
飛ばぬものをよ

冬に立つもの

末ほそく下枝引き張るたけ高きヒマラヤ杉は
冬によき杉

さんさんとヒマラヤ杉を洩る月の後夜たちに
けり冬に立つ影

椿咲く

わらべども憎む境の切崖は陸橋がかかり椿花
むら

花深く紅き椿や下枝さへ光るばかりを上にも
上にも

小学生ら聲放りあげて行きにけり椿の花がひ
たあかきなり

花ふかき椿はすごしつらつらと出て来てはく
ぐる子らが足竝

老椿下照る道の春の泥洗足の池はけだしこの
奥

雪の夜

雪つもる窓の内らのゆふつかた火映親し誰か
 爐に居る

雪しづりけはひ幽けき夜の閒にも紅毛びとは
 火にか樂しむ

マントルピース火立華やぐかたへには金髪の
 ふさ透りゆらげり

穩しき笑なるかも片頬照り爐に寄る母の何か
 言ひつる

老びとの紅き上衣はをさなくて灯にものがない
 し毛絲編みをる

春日展望

咲きあかる花かあらしも木原山松の木のまの
しろきを見れば

櫻咲き馬込の谷もしづかなり霞むかざりがし
ろくのみ見ゆ

向^向丘^丘の木のまに見ゆる赤がはら家古風にして
春日おだやか

本門寺の裏山道ののぼりおり松の木のままの山
ざくら花

花曇源藏原の夕影にみづみづし燈^燈のひかりい
でたる

女童

九歳にて變質の子なり。ひそかに訪れてやまず。

をさなきはをさなかれよと數花の通草の門に
立たせつるかな

女童は心くるへり崖の端のほのかに萎ふ畫貌
の花

畫貌やここだかなしき女童を日さかりの門に
隔てさぶしき

うち見には童なれども女子やまさなきことも
美しみ思ふ

つきほなくかなしかるかながなべて年のへ
だたりは三十あまり五つ

言ふことはねびてきこゆれ女童や母を離れて
 などか死にせむ

夏衣の生絹が裾の高踵なんぞ童が少女さびす
 る

女童は水に戯ゆるしろがねの鱗のごとかなし
 かりけり

草上畫餉

畫餉には庭の芝生にちかに坐りわが眼先のか
 きつばたの花

飯粒に沁みつつ白き日のひかり子ら食みあま
 し父われが食む

短夜追憶

消え易き花火思へば短夜は玉とうちあがる青
き蓋

水の上や夏は花火の宵々にひかる投網をか
ひるげ消つ

短夜の馬込なりしか梟と木菟のこゑの互みに
はして

砧村へ移る

子鴉は嘴黄なり車前草や穂に立つ道の埃踏み
つつ

馬込緑ヶ丘

五年の後

馬込緑ヶ丘、この門のヒマラヤ杉、来て見れば木高くなりぬ。夜寒にも燈はとぼりをり。人や来て住みつきたらし、わがごとやこもり息づく。星月夜、狭霧立ち立つ、この家の、鐘と撞木がいよなつかしも。

§

秀に揺れていよよ木高き影見れば下枝もふかく曳きにけるかな
 たけ高きヒマラヤ杉の星月夜二階の窓に灯のうごく見ゆ

§

門庭よ冬の夜寒も燈は洩れて住みつきたらし
人香こもれり

この門よ横も通草も目立たずてすがしかりし
か雨つづりつつ

世田ヶ谷風塵抄

昭和三年初夏より同じく六年の同じ季節に至る、
四年間の、世田ヶ谷若林の生活に由る。尤も三年に
は歌作乏し。家は街道にのぞみ、鶯音と塵埃と筆硯
の繁鎮とに苦しめらる。しかれども邸内廣く、花木
多く、奥の庭やや古風にして四時眼を樂ましむ。日
常之に添ひ、風韻幽かに成る。

I・月に飛ぶ雪

言祝

大君、日の本の若き大君、神ながら朗らけき
 現人神。青空やかぎりなき、國土やゆるぎな
 き。萬づ世の皇統、皇孫や天津日繼。ああ我
 が天皇。大君、道の大君、大稜威。今こそは
 依り立たせ、けふこそは照り立たせ。高御座
 輝き満つ、日の御座ただ照り満つ。御劍や御

光添ひ、御璽やいや榮えに、數多の御鏡や勾
 玉や、さやさやし御菌や、照り足らはせ。大
 君、我が大君、現つ神、神ゆゑに、雲の上の
 照る日の光 采りてますかも。

反歌

黄檗染の大御衣明く照り立たし彌さやさやに
 若き大君

楓紅葉

かくばかり楓ありとは知らざりき
織ぎ織ぎて
染む秋を驚く

この庭に一木二木と照らひたるか
へるで紅葉
時了りけり

背戸

鶏頭はつぶさに黒き種子ながら
鶏冠の紅よ燃
えつきすけり

わが背戸は食用菊の黄の花の残り
とぼしく霜
の滴りつつ

冬朝

石庭せきていに冬の日のさしあらはなりまだ凍こみきらぬ青苔あおこけのいろ

庭苔ていこけに木の根影ねかげひく朝あさの閒まは冬も幽おとかに美しくして

木のま洩まる冬の朝日あさひのすがしくて時ときならぬ土つちのかをり息いきづく

うすうすと朝日あさひさし來きる椎しいの根ねに心こころ寄せつつ冬ふゆはこもれり

檜葉垣ひのゑかきの外そととほりゆく影かげながら早はやや親おやしもよ冬ふゆは透とおき見みゆ

木榭の冬

木榭の一本の表闌けにけりみ冬ながらに日ざ
しもちつつ

木榭の葉洩れ日見つつ思ふなり濡石に出でて
歩く蟻あす

短日

向ひ見る冬の梢となりにけり細みつくして眺
めまさりぬ

晝餉過ぎいくら経たぬを木群には早やしるじ
ろとかかる夕霧

軍馬

この日ごろ近き空地に来て騒ぐ軍馬ありけり
風の夜寒を

軍馬の群この夜とどとし来て居りと思ふだに
よしを千葉聯隊の馬

観兵式の豫行演習に朝出でて夜は寝に還る軍
馬の群らし

§

山茶花や井の水汲むと来る兵のバケツ音立て
ぬその凍土に

兵士来て井の水汲むと我が太郎眼もまじろが
す山茶花の午後を

§

夕凍^{ツキ}を子らと見に出^デるとなり原軍馬は群^ムれて
還^マりるにけり

夜に還り朝發^{アサ}つ馬の草床は風吹きぬけて置く
屋根も無し

濃霜置き軍馬入り臥す隣原夜はふかくして騒^{さわ}
ぎぬるかも

霜は満ち軍馬のたむろしづもらず糠星の數^{かず}の
ただにきらめく

夜のほども騒ぎ立ちゆく音すなり觀兵式に列
なる馬なり

大君のけふみそなはず軍馬なれ蹄の音もさや
かに發つべし

§

駒並めて兵還り來す代々木よりただち本隊へ
駈けにたるらし

隣の原また騒ぐなし風のみぞ夜どほし寒き空
に地にきこゆ

夜はしげく軍馬寢に來し草の原馬臭き肌のこ
もりかなしも

寝ねがてぬ軍馬なりしか夜に聴きてなにか心に觸るるものありき

その後の夜

常ならず物の幽けくきこえゐて今宵の雲は凍みこごるなり

ある冬の日

日おもては雑木にこもる霜の氣の照りあたたかし春めきしかも

輝かではふ垣内の芝生には冬の日ざしぞ和ぎたまりたる

水邊早春

青鷺にしら鷺まじりあはれなり氷のひびの水
に薄きを

仄もやや角ぐむ葦のさ青の芽に電球がひとつ
流れ寄りつつ

書齋と月

疊はる木群のうしろ明るめり月の光の立ちそ
めにけり

硝子戸にのぼりて黄なる圓き月瑜伽師地論を
讀みつぐ我は

青葡萄の頃

破^やれはててむなしき鳥^と屋^やの葡萄棚葡萄の房は
垂りそめにけり

むべの棚いまだ青けどひえびえと日ざしとほ
りて風うごくなり

九月

もちの葉の葉越しに見ゆるわくら葉は櫻なる
らしよくそよぎつつ

木のうれにふけつつ澱む夜の曇り甜瓜^{メロン}のごと
き月黄ばみ在り

夏をこもる

高々とのうせんかづら咲きにけりただにあは
れと観つつ籠らむ

家垣のひともと木むくげ権光さ發し開くただちを土埃つちほこり
來る

もちの木は葉につむ埃ほこりいちじるしじりじりと
照る眞日の光を

街道の地ち響ひびきしげき日のさかり鏡にうごく木は
ちすの花 書齋

窓の上に垂りつつそよぐ蔦かづら涼風たちて
實の綴り初はじむ

萩のくさぐさを

吾が宿の萩の中垣荒れはてぬいきれて暑き男
ぐさの花

青萱の野萱にまじるさざれ萩この朝涼をすで
に綴れり

颱風の逸れつつしげきあふり雨白萩の花のし
とど濡れたる

夕ほてりこのごろつづく芝生には木の椅子が
二つ猫萩のはな

日時計の夕かげ長くなりにけり宮城野萩の叢
咲の花

高野楨

からかさもみ、一名高野楨、或は金松

雨のふり観の幽ひそけくて真ま深ぶかなりからかさもみ
のしだり緒の笠

高野楨雨こまかなり秋もややけしきだちつつ
冷ひやえまさるらし

芝庭の小宴

田中智學、高村光雲雨翁、並びに國醉會の人々を迎へて

芝庭の日向最寄りにくむ酒の老おいよろしもよ小
春過ぎの雲

日向べは木々の紅葉の過ぎぬれどまだあたた
かし菘しゅう敷ふき竝ならむ

蔦紅葉

わが家は煙突の壁の蔦かつら日ましに染みて
煙立てにけり

わが窓は日向の壁の鍵の手を常春藤もみでて
照りかへしつづ

書齋

郁子と通草

わが家はボウチの棚の郁子の實のこよなく熟
れて冬來りける

とり食めば核は多けど齒にしみてすがすがし
かも郁子の實のつゆ

こもごもに郁子はと通草あけびをとり食みて郁子はがよ
しちふこの子があはれ

郁子は食はむとひたぶるの子らやうちすすりしじ
に核こ吐はき眼まもまじろがず

おほかたに遊び足りたり夜ふけたり子らよ寝い
なむまた明日もあらむ

寒き日

多摩川に砂利あぐる音の風向かざむきをひと日きこえ
て寒かあけずいまだ

日につのる寒さもちこたへ諸もろの葉のかがやけ
る見れば稚よ冬の葉

思ひ屈しぬくき日あたり出て見ればかへるで
の根に雪ぞ光れる

かがみゐて寒き日向や下心ふかく悔づる子ら
に隙與へけり

淡々と火の見の灯あしたちにけりすぐろには
そき木のこすゑより

霜に聴く

1. 十一月五日深更、「赤い鳥童謡集」序成る

思ひ繼ぎ長きはしがき了へにけり夜ふけかす
かに吠ゆるものあり

かんとうちて半鐘の音とめにけり火の消え方
は夜も凍みるらむ

霜の空透きとほり青しこの曉あけや月は落ちつつ
松まつ二木見ゆ

2. 十二月十三日夜より十四日拂曉に至る

夜ふけて寒くひびかふ音ながら沿線に住めば
けだしよろしき

ひそかに吾が本質をうたがはず大禪寺柿かきに
をすかとあてぬ

あろり火に蛇經を讀めばおもしろく身うちゆ
るがして走るリズムあり

夜はふけぬしゆんしゆんとして煮こごれる林
 檜のつゆの紅き酢醬

野砲隊とほりしがとどろきやますいづべの霜
 に闌けにつつあらむ

しみしみと澄みて來にけりまさしくもしづか
 に霜に聴くべかるらし

絹笠に黒く粒だつ蠅ながらオスラムの熱冬を
 光れり

冬の夜は物の正しき影すらやただにすさまじ
 く燈が明るのみ

幼さびかくて我あれやつゆだにも童ごころは
 けだしとほらす

冬の蠅そこら遊びし小夜ふけて居るものは無
し凍みて來らしも

燈は明し大藏經のうしろゆく鼠の尻尾影うご
くなり

常ながらおもて通るは夜發ちして多摩よりの
ぼる牛車かもあはれ

あけがたはいとどしづもる野の霜をひたすら
や赤き電氣爐の息

遊行して障り無しふ日はあらずただになづ
みぬうちこもりつつ

武藏野に紫つづる蘇枋の果わが縛著は子ゆゑ
きびしき

東 聲

前の夫人と別れたる頃のこと、及び挽歌

椎が根に素焼の鉢の三つ二つ見に寄るべくも
花はあらざりき

家^ア廂^ビに及ぶ椎が枝そこらくを明りたのめて伐
りし椎が枝

縁の端^ハに日ざし頼めて見やる眼も力なかりけ
むか土をのみ君は

庭土にちりて久しき椎の花なげきこまかに君
も堪へにき

窓さきのちひさ篠の子篠の子の秀^ハの上^ヘにのぼ
り露は光りき

夜のほどろいつか寝入れるその頬には涙なが
れて薄き髪の毛
鹽原の一夜

いついつとえは諦めずありけらし消なば消ぬ
かに末はなんぬる

木原山日暮れて寒き人あしの中のひとつの音
絶えにけり
挽歌

少年騎馬隊

十二三頭馬乗り入れて來りけりこの跑を見よ
と少年騎馬隊

木柵は冬によろしき門庭を馬糞火氣立ち騎馬
は足踏む

息しろく凜々しかるかも少年騎馬隊馬上敬禮
の眼を向けにけり

夕凍を門出づる子ら馬上なり早や疾駈に駈け
つつゆくらし

門庭に馬糞火氣立ち日は寒しすべなあはれと
われは掃きをり

月に飛ぶ雪

この月を小竹の葉叢に影さして飛びちらふ見
れば雪はおもしろ

寝帽つけてまだ讀む月の午夜しきり粉雪のけ
はひさらめく

樂しみと

三月五日夜

樂しみと心こめゆく夜のさなか出で入るふか
き息づきを吾れは

ほればれとおのれ遊ぶとたのたのと磨る墨の
いろはひとり吾がもの

磨る墨やにじむ光の粒だちのにはひこまやか
にのりて來るもの

樂しみとひとり恍^はれつつ磨る墨はむべこまや
かにとろりとあるべし

草假名は心ゆくなり細^ほがきの面相^{めんさう}に書けばな
ほとおもしろ

薄暮雪

落ちてけりあはれよと見るその棚の通草とど
として積む雪とともに

雪のいろみなぎる見れば日の暮は下沈みつつ
よく積みにつけり

雪片

寢室にて

玻璃の窓棧の隙吹き吹きたまる雪片しろし小
夜ふけてける

夜はふかし隙間吹き入る雪の粉の今は小床に
飛び亂れ積む

夜のふけの鏡にうつり幽かなり雪片は白しつ
もりつつ澄む

寒鴨

水の手にさけぶ野鴨の數きけばねもごろなら
ず月夜きびしき

II・春の銃眼

篠むら

吾が門のおもての細き美箒原みすすは寒しよ
くしをりつつ

美箒原風の戯えのよく見えて春早き朝の日の
當りなり

目にしげき風の戯えは寒けれど美箒が原よ春
は來にけり

美箒吹き篠吹く風の朝東風は目もすまにして
音のさやけさ

春と言へどいまだ篠吹く風さきに楊は枯れて
影あらはなり

風の夜

風の吼え聴きつつくだつこの夜さり玻璃戸に
 うつり吾が顔は見ゆ
 風の夜は暗くおぎろなし降るがごとき赤き棗
 を幻覺すわれは

しばしばも息吹きやすむ風息のこのけぶかさは
 互えかへるなり

夜の風の息づきの閒や下り沈む蘭鑄の尾鰭ひ
 らきゆるがす

風の音すさぶこの夜の篠藪をほそくとほりて
 眞澄むこゑ何

うら向ふ春なりながら美鶯^{みう}吹き夜をしきり吹
く風のするどさ

家垣^{いえかき}を一夜^{ひとよ}あらしの吹き落す椿^{つばき}のあかき花も
あらむあはれ

庭の木々にすさぶ夜風はさりながら咲きつつ
やあらむそのあるものは

この闇の木々吹きひらく夜風には少くも明^{あき}き
燈^{あかり}を向けてあらむ

オスラム電球ひたと見つめてゐたりけり何ぞ
夜風の息のみじかさ

繁^{しげ}はじく椿^{つばき}の蕊^{しん}の粉のひかり外^{そと}の嵐に燈^{あかり}は動
くらし

夜に起ちてはげしけれども物の芽に息つめて
吹く風のうれしさ

息つめて却て冷えきる夜の風閉ぢぎ吹く風は
いまだ起らず

燈のもとに眼はひた向ふ妻とゐて何か後引く
暗き野の吼え

玻璃の戸をがりりとかじる夜の風の白き齒す
ごし我は見むとす

ぬか星に猛る嵐の吹きあふる照葉の椎の鋭き
光なり

黒松の葉がひに光る小糠星風の喚びを燈は消
えにける

風の先^{さき}またくしづもる小夜ふけて軋^こむ夜聲の
時をしむなり

風は夜^よはさだまりにけりうつ雨のはらはらと
來てそれも止みたる

しきりなく自動車とほる夜のおもて閑^まどほに
なれば黎明^{しのめ}近し

春 雨

菊子中耳炎を病む

耳いたむ妻とこもりて夜はふかし物のこまか
にはじく雨あり

この夜ふけ聴けばこまかにきこえゐる小^こ雨^{あめ}に
しあれやそそぐ春雨

寢室の朝

二階、北と東の窓

北の風吹きは入れどもこの窓の隙ひまあかりつつ
菜のあをく見ゆ

百日さるすべり紅ぬめりあかるき春さきは眼もぬくむな
りその枝この枝

櫻を思ふ

櫻小學校に櫻の校歌成りにけり子ら歌ふ頃は
花の咲かむぞ

濠は樓ろ市いちに冬は貧しき道の下しも櫻小學校に通ふ子ら
はも

春意動く

移るべき家をさがすと春早し土耳其の帽をか
ぶりつつ出づ

野の方にしろき煙の行く見ればおろそかなら
ず春はうごけり

春もやや芽立張り来る木々のまに瓦の屋根が
うちかすみつつ

風道にひかりてしろき花ひと木しきりにさび
し何の花ぞも

この空の湿りにあかる日の在處梢はすでに紅
み張りたる

山ゆけばしみみに戀し日のさして黒木に萌ゆる色のやさしさ

春まさにねぶたの芽ぶきいちじるしちよろろながるる水もおもしろ

つくばひ

つくばひの日あたりに見て春あさき土賊は硬し叢立ちにけり

つくばひの水に映るふ赤松の木はだなりけり雲うすら行き

つくばひの上清む水の底にして垢かぶりけり
椎二葉三葉

風空

春と言へば日ましに乾く畑土の火山灰飛ばす
錆いろの風

霾らし嵐吹き立つ春さきは代々木野かけて朱
の風空

風面朱に吹き立つ春眞晝ゑぐき埃に食いとふ
なり

かき濁り霾る春やおぼほしく光無き外に家さ
がしつつ

月のごと白き夕日や霾らし殿む眞西の朱のし
づけさ

春雨を待つ

まだ寒く硝子の障子鎖し竝めてたまる埃の黄
に濁りつつ

鶯やまれに梓の下枝に傍目すれども鳴く音し
めらす

築山の莖咲く

土の膚乾く日向の薄ら影すみれの花はあてに
やさしさ

築山の笹の根かたの目のあたりそよぐ莖は見
れば幽けさ

家垣

家垣の椎の諸木の鏡葉の裏葉入り揉む雪おろしの風

風隠のぬくき垣内の高野楨これの一木の春のしづけさ

春の蚊立つ

椎のまに楓嫩芽のあざやけき吾が家垣を愛でてこもらふ

春の蚊の立ちそめにけり芽楓の下照りあかりしづけき土に

§

四阿屋に虎斑の竹の葉は落ちていささめながら
雨ふれりけり

風竹を萬古の狸立てりけり春の日暮は愚かな
るらし

§

うち沈み石の面蒼しかへるでの若葉明りに蚊
のちらひをる

若葉していくら經たぬを楓の葉べりはあかく
染み出すすしさ

春朝細雨

階上の東の窓より

春は朝ほのぼのい凭る吾が窓を小雨のり來る
とべらの木見ゆ

石のべや若葉かへでとよくうつる春日燈籠に
雨ふりにけり

築山の天満宮に雨はふり春雨にあれやふたも
と赤松

笠の松たゆらなゆらにありにける風ありとし
も見えぬ春雨

おもしろの春雨やとぞ人の言ひにけるその雨
ふれりさくらの花に

春雨のあと

中垣をこなたへ明る山吹の八重咲きの花は雨
ふかき花

ここの庭ひろびろと雨の降りにけり朝出でて
見る山吹の花

春晝落花

木槿のしづけき空へちりかけて櫻はしろし光
る花びら

木槿の一木が陰の行潦さくらの花は漂ひにけ
り

春じめり散りたる花は滑岩ゆめいばに平ひらに貼はりつきいとどしき白

庭土に花びらしろき春眞晝つぶさに観れば風あるかなき

風たまゆら土にしづけき花びらのひとつ舞ひ立ちほらら皆立つ

春まひる土移りする花びらの光りつつとまり後はしづけき

石いしが根ねにともすれば寄る花の瓣はな風無かりけり動きつつ止む

新樹の頃

世田ヶ谷は榲^{けのき}竝^{なみ}木の若芽^{わかめ}とき牛車^{ぎゅうしゃ}つづきて騎
兵隊がまた

榲^{けのき}木群^{むら}寒^{むせ}けかりしか夏^{なつ}向^{むか}ふ今^{いま}いちじるし若芽^{わかめ}
萌^もえ立^たつ

榲^{けのき}の木^{のき}の芽^め立^たこそこまかなれ寢室^{ねむろ}の窓^{まど}は朝^{あさ}開^{ひら}
け放^{はな}つ

§

曇^{どん}天^{てん}に萌^もえつつひかる榲^{けのき}若^{わか}葉^は浮^うびてしろき淨^{じゆ}
水池^{すゐぢ}の塔^{たつた}

あさみどり芽ぶくくぬぎの木々の間に櫻は乏
しちらひそめつつ

日にけに雑木の萌のかがやけば身はかいだる
し胚芽米食ふ

若葉風揉み來る見ればおそらくは田には蛙の
眼も光るらし

§

木のま透き花遠じろく見えにける若葉がくり
になりけるかな

木の芽ぶきいつかしづけくなりけり葉に出
づるものは葉に出たるらし

砲車タンク轟進

とみにあをむ芽ぶき楊や門いでて砲車とどろ
 来る音感じをる

春惜むこの家ゆするは日の開けて砲車つづき
 来る永き地響

タンクの無限軌道の地響なり一臺が行きてま
 た續き来る

タンクの銃眼にすわる大きな眼かがやけば
 春ふかむなり

木々若葉し日は照りかがやく地おもてを押し
 ひしぎ行くタンクの齒ぐるま

砲車トラック装甲車機關銃隊日毎とどろかす
地響を吾れは

重砲隊とどろ壓し來る地響に叫び應ふる鶯鳥
早や亡し

春宵

起床喇叭吹き習しゆく木の芽とき月夜にはよ
き夏向ふなり

春今宵喇叭吹きさしわが門を青年團ならむ何
か言ひをる

二方に喇叭吹き合ふ夜のおぼろ田にも蛙の啼
き出したしさ

通草と雨

棚にして見のすがしきは雨あとの通草あけびが綴る
蔓の葉の萌もえ

ぬか雨あめのちららにむすぶ雌雄めおとこのはな通草あけびはす
がししじみ蛭しじみいろの花

蛭花しじみ通草あけびちりしきおびただし時に揺りこぼす
棚の上の雨

雨落あめおちに通草あけびの花はちりう泛うきて中流なかれをり清き
むらさき

雨たもつわか葉の通草あけびすがすがし棚ぬけてそ
よぐことごとの蔓

風二三日

この硝子戶外との日の照りにわが見るは風の吹
きまくる八重ざくらのみ

風の今朝八重のさくらはほたほたと吹きもぎ
られて色のさやけさ

柏 楨

石のべに緑沁み出づる嫩芽わかめ立たはひびやくしんの
春のすがしさ

清あしくも今朝ふる雨や新葉にいば立つ矮檜せなれのいろの
石に映ろふ

兵卒

肩章の三つ星を見よと來りけり手をあげにけり背は低き兵

汗ふくと軍帽をとり息づけり額ひたいのみしろき上等兵あはれ

此處に來し安けきかどかとおぐらゐて響まきぐる兵卒あはれ

對あひひゐて兵卒はにほひはげしけれ街道に遇ふ縦隊のほひ

兵卒はくるしからむとこの照りを病ふなきかとただに見てわれは

椿朽つ

踏處なく見ゆる椿もおほかたは早や朽ちかけぬ紅きは三つ四つ

落ちかきみ闌くる椿やその花のひとつ紅きに蟻のぼりをる

吾が門

吾が門は築士の端の白薔薇おもてへは向かずこなたへと咲く

眺めぬてくぐりの白き花うばら出つはひりする子らがよろしさ

五月

わが庭の薔薇うばらのとぼそ春過ぎてくれなる久し
夏はくるしき

山吹の花ちりがたとなりぬれば蘇枋すけは染めぬ
紫の枝

轉居の日近づきて

家移うつると今あらためて見るものにこの家垣の
椎よ芽楓かへて

咲く花は後住のちむ人の樂しみとのこしたらなむ
その草花は

雪つもる通草あけびの棚は飯食いひむと朝夜よろしみ茶
の閒より見し

をはりの夜

ここに聴く遠き蛙の幼なごゑころころと聴け
ばころころときこゆ

砧村雑唱

昭和六年初夏より同八年の冬に至る、砧村の生活に
由る。此の篇年次に章を分つ。此の砧村大藏の野に
於ける鐵塔と雲との風景は快適、日月ともに明らか
にして、季節の推移亦おのづからなる玄理にかなふ。
自然隨順の三年なり。

I・白
南
風

初夏の代々木

明治神宮

若葉榎しきりかがよひ午ちかし明治神宮の春
蟬のこゑ

御庇の檜皮の黒み夏まけて映る若葉の清にま
ばゆさ

赤松の木群しづけきここの宮椎の若葉の時い
たりけり

夏向ふ五百枝嚴櫃葉廣櫃日にきらきらし若葉
嚴櫃

雨は今朝ふりながしけむ若葉櫃や神苑の森は
塵もとどめず

ここの宮光る若葉の葉ごもりに一羽雉子の聲
ひらくなり

同じく西参道

明治神宮西参道の晝開けて清きひと照りの風
ぞ過ぎたる

晝の林泉光る若葉の靄ごめにまじりて黝き松
のしづけさ

風透る廣き芝生の参り路は玉敷きならし目も
すまの照り

神の苑木立おもての眞日照りを歩く雉子の一
羽たふとさ

眼は向ふ芝生なだりの日のおもて寶物殿にう
かぶ白雲

ほのぼのと眞晝はこもる靄ゆるゑに一木のしる
き花のめでたさ

お池にはいつくにも見る影ながら龜の子が揺
る水際さざなみ

代々木練兵場

代々木練兵場朗らけく明し若葉とき上下八方
にとどろく物音

代々木の空若葉盛りあがる色見れば青あり緑
あり時闌くるあり

赤土に伏せのかまへの兵ふたり照りあきらけ
し見ざるべからず

砲車隊駛る夏野の日のさかり遠ざかり遠ざか
り立つ後埃あつちほこり

新居前景

朝眼には若木櫻の葉ざくらの梢葉の紅の裏を
よぎつつ

夏向ふ霞にあかる若葉木の木群のみどり盛り
層むなり

田の遠は若葉かがやく日ざかりを往還の埃吹
きつけはしれり

桐の花ふふむこなたの日おもては蛙が鳴きて
水田さざなみ

白南風の頃

白南風の光葉の野薔薇過ぎにけりかはづのこ
ゑも田にしめりつつ

大葉栗夏はこすゑの房花のさやかにあかり田
毎代搔く

水口のえごのひと木の群花は田を植ゑそめて
いよよすがしさ

刈りしほと

刈しほと麥は刈られぬ。刈麥の穂麥は伏せて、
畝竝にさららと置きぬ。麥刈れば戦ぐさみど
り、畝の間にすでに伸びつる陸稻ならしも。

§

刈しほと麥は刈られしこちごちをこのごろし
ろし馬鈴薯の花

熟麥の穂麥刈りとする畝閉には早やつやつやし
茄子の若苗

茄子畑は穂のみ刈りそぐ立莖の柵明し麥のし
がらみ

農村月夜

西山野

月の夜はいとどかぐろき家の森を田には狭霧
の引きわたるめり

狭霧立つ月の夜さりは村方の野よ香ばしく麥
こがし熬る

東山野

月魄のしろき夜さりの離れ雲麥たたく音の村
にさびしさ

水の田ちかく

朝なさな我が門いでて見るものにしみじみと
よし植ゑし水の田

竹山のうすきみどりの朝じめり水の田ちかく
見るがすすしさ

竹若葉

竹若葉みどりこまかき山方のひといろのなび
き朝目にも見よ

わせ竹の若葉に霧らふ夏がすみ何か日中の音
関くるなり

前の植田

植ゑ竝めてみどりすすしき下の田を啜も畦も
見のあをみつつ

田の水に茅萱うつりゐしづかなりこのすがし
さの眞晝經ちたる

田のあせをこなたかがみに又手つかふ人かげ
見れば梅雨あがりけり

田は植ゑてうつりよろしき秦皮の若葉も過ぎ
ぬ五四本づつ

畔竝木遅き若葉もふきたちて青葉がうれのま
た明るなり

青一色

朝目覺清にすがしきこのごろは田面も畑も青
よひと色

あさみどりしきり揺れ合ふ竹群は若竹の秀と
風にすすしさ

夕べの青田

さしあかり夕かげあをき竝田にそよそよとあ
る時化後の風

さ青の田に沁みつつひびく蟬のこゑ夕づきに
けりうつくしき晴

梅雨長し

梅雨過ぎてなほも降りつぐ日癖雨このごろ見
ねば庭も荒れたり

梅雨のまも桃の繁り葉末葉立ちまた搔き垂れ
ぬ夏檜葉のうへ

梅雨あけの庭

梅雨あけの葉かげに照らふつぶら玉豊後梅は
紅し花のごと見ゆ

コスモスの立莖あかき梅の根はこぼれ日つよ
し地靄立ちつつ

空のむた蒸しつっしろき日は暑し草いらふ手にひかる汗はや

土ほてり闌けつつもあるか日のさかり爪立ちてしろき猫はかまへぬ

外に出して晝は果敢なき鉢ながら瓢箪の花の夜は咲きにけり

月と水田

蛙鳴くくらき水田の夕澱み電柱に添ひて月のぼる見ゆ

圓けくも未だし光らぬ朱の月ひむがしの塵の澱みにぞ見ゆ

ゆらぎたちややに照り来る月の出を田には蛙
のこゑしきるなり

短夜みじかよの月の表おもてとなりなりにけり蛙かひ鳴く田がただ明あ
うして

月の道いつか南へ下りぬらし光は涼し田にひ
たりつつ

雨夜月

雨夜にも裏ゆく月のしろじろと空あかりして
闌たくるものあり

棚曇たねかげ遠じろき月の夜は狭田きだの水田も澤の
ごと見ゆ

雨夜月陰かげはもてどもうすうすに田の水あかり
かはづ音立つ

水の田の遅き月夜の時あかり泳ぐ蛙かきのくろく
しづけさ

螢

闇を來てわれはいきづく小夜ふかく螢の光田
の面移ろふ

月の出や稻葉爽さわ立つ夜嵐に螢あふられ田の面
立ち消ゆ

月夜風あふる田づらを消ゆと見し螢は高くま
た光るあはれ

新月

うち蒼み暮れて
間は無き西の手に
早やあはあ
はしほそき
新月

門畑やそよぐ
陸稻の夜に入れば
月ほそく見ゆ
黒き屋のうへ

唐黍咲く

もろこしは花つけ
そめし上の穂に
緑蜺蝶の翅
ひらきつつ

唐黍や立穂の稚き
八つ房に照りつくる
しろき
早雲なれ

日ざかり

たばたばと蛙かはつこ混まみ合あふ日のさかり田岸は白き
虎の尾のはな

日ひざかりの田中の黝くろきひとつ松夏はけはひに
闌がけにつつあり

日のさかり暑さ堪へゆく田のへりは桑の實黒
く忍冬の花

唐辛子花咲く頃やほのぼのと炎えん天てんの畝うしに歪よむ
人かげ

白しろ小こ雲ぐもかがよふ野良の末にして鐵塔のよき閉かん
隔かは見ゆ

竹煮草

竹煮ぐさ朝行く月のわづかのみ穂には明りて
風騒ぐめり

竹煮ぐさ夕立つ雨の亂るれば風さへすさび心こころ
神かみも無し

暑き日

身のほとり暑き日なかや眼につきて疊に猫の
毛はつまみをる

蟬しぐれしづかにかよふ晝ひる闌たけて子と組み立
つる名古屋城の型

蟬時雨

蟬しぐれしづけき山に行き向ふ眞晝は明し我
があるきつつ

蟬時雨ながらふ聴けば母の手の冷たき手觸り
繁みにおもほゆ

蟬のこゑしづもる山の晝闌けて光る黒檜の土
用芽は見ゆ

茅蜩を聴く

東山野この夕はじめてきく聲の茅蜩のこゑは
竹にとほれり

ある月の夜

月すでにのぼりて淡き黄のしめり茅蜩のこゑ
ぞ森にとほれる

柴は茄子の月夜の陰ながら傍ゆく水のよく光
るなり

月夜空高ゆく夏の薄雲は消えつつしあれど涼
しかるらし

夜雨近し

雨夜雲移ろふ月のつきつきと先あかりつつす
でに露けさ

月の晩景

猪子雲照り出る月の傍雲の氣に引く見れば茜
細雲

青き田

翔りけり狭田の青田のひと色にきようきよう
としていち早き百舌

青き田の見はらしどころここにゐて二階は涼
し風そよぐ見ゆ

目に移るさ青の稻田のそよろ風夕かげのいろ
と満ちてすすしさ

秋夕

うち向ふ竹の林の夕じめりひぐらしのこゑを
ひとり聴きゐる

氣色けしきには匂のみなる夕霧の竹の端山はたけにありて
しづけさ

庭園の晚餐

天蛾

天蛾あまがの翅はねあげて來るゆふべには夕顔ゆげんの大きな花
もこそ咲け

父我^{ちち}は言^{こと}にうちあげす月の出^いを大^{おほ}き天蛾^{てんか}の翅^は降^おりる見^みる

葡萄と月

一方^{ひと}方に蛙啼^{かは}く田^いのはるけくて月^{つき}わたる下^{しも}び雲^{くも}堤^{つとみ}引^ひく

照^ある月に面^{おもて}ふりむけわがかざす葡萄^{ぶどう}の房^{むら}のつ
ぶら實^みの玉^{たま}

房^{むら}ながらまろき葡萄^{ぶどう}は仰^{あや}向^むきて月^{つき}の光^{ひかり}にうち
かざし食^たむ

雛^{ひな}鳥^{どり}の咽^{のど}喉^どあけたる子^こが口^{くち}に葡萄^{ぶどう}つぶら玉^{たま}入^い
れてをりわれは

曉
闇

木群こぐんには早こやも湧ゆきたつ蟬せみのこゑまだあかつ
きの道はくらきを

蟬せみのこゑ湧ゆきはたてどもこの朝あさやなにか勢いきほひ
におとろへにけり

門前の影

朝あさひらく白しろき木き権けんの門かどながら夕ゆふさりさぶし花
はつづかす

電柱でんちゅうの片かた側がはくらき月つき夜よ照てり石いしころに茅かやに露つゆぞ
満みちたる

卷積雲

白魚の移ろふ群のひとながれ初秋の雲の空に
すすしさ

流れけり鱗だちつつ正眼まきめにもすすしくしろく
みなぎらふ雲

初秋月夜

月あかり水脈みづ引く雲の波だちて夜空はすすし
水のごと見ゆ

月に見て水脈みづだつ雲の風道かぜみちは薄らにしるきも
のにぞありける

夕映の田

稔^{あひ}り^だ田の夕映すごき乾^ひ田の泥^ぬうち絶えて鳴か
ず蛙^{かは}ひさしく

秋の田の穂向きに移る夕雲^{ゆふぐも}の影迅くして後ぞ
焼けたる

秋 冷

葉^か鶏^ま頭の火立^{ひだち}にそよぐなるこびえ日は透^とりつ
つ色の涼しさ

颱^{あらし}風過ぎいたも冷えたる稔^{あひ}り^だ田になにか蛙の
時ならず鳴く

月の夜の庭

月夜よし二つ瓢ひょうの青瓢あおひょうあらへうふらへうと見
つとおもしろ

ぬばたまの夜にして開く白き花大き夕顔の開
ききりたる

檜葉の聞

檜葉のまを移ろふ月のかげ洩れて涼しかりし
か庭に出でて飲み

檜葉のまに光る蜘蛛るき月夜には揺れにたり
しか糸もとどめず

秋日向

日の光染みですずしき群ぐさによき蟲のこゑ
のほそく立ちたる

帝草株立紅くなりぬれば日射すずしか猫もつ
くばふ

何か猫草にとり食みつくづく舌なめすりぬ
けだし日は秋

秋雨ほそし

軒の端や青き瓢にふる雨の雨あしほそくうち
しぶきつつ

渡り鳥の道

その電線は庭のまなさきに見ゆ。

野分^のたち翔^かりつぎ来る秋鳥のきそふ鋭^と聲^{こゑ}は朝^{あさ}
明^けまされり

群れわたる鳥かげ見れば秋空やただにひとす
ちの道通るらし

秋分

つぎつぎと来て立つ見れば電線^{でんせん}やこの空ぞ渡
る秋鳥の道

よきかげよ向ひの松の木ぶりにも秋分の日射
しづかにし見ゆ

秋 祭

啜ゆきもみつつ勢はまる樽みこし夕かげに見えて
稻は穂の波

樽たるみこし山のすそ田の夕かげに出てはすむな
り霧な棚引き

この道

草堤夕かげ永し誰ならず我があゆむなりかく
思ひあゆむ

秋のいろただにあはれと道芝の小砂利まじり
に夕焼くる踏む

秋
山

なぐはしき山とふならね
雑木立ただにしたし
き秋ふかき山

雑木山朝に見あるきたべにも
見てもぐるなり
足の向くまま

遠足の歸りを

朝出でて歸り來る子とあひに
けり歩みつつ聽
くその秋山を

相模の阿分利の山の秋山のなに
の紅葉かもと
も染めたる

菊

日にはほふ閑かなる戸や門竝かどならみの秋ふかうして
黄菊咲きつく

秋まひる隣にふかむ菊の香のいつかこなたへ
うち匂ひつつ

月と霧

吾が門にさし入る月のかげ見れば昨夜よるのあら
しは激しかりにし

観るものに月の光は流るれど山櫺やまらざりの葉にさら
にすすしき

秋はいまさなかとぞ思ふ向つ岡月明うしてこ
 の夜十六夜

狭霧立ち冷ゆる夜頃や先驅けて月に向く子が
 髪毛かがよふ

月夜風しろくかがよふ穂すすきの旗手は長し
 なびかひにけり

§

架線橋つづきて霧らふ空ながら線路は涼し月
 明う照り

小田急線

ひと村に白くかぶさる乳房雲月の光の滴りに
 けるかも

糯もちの田はいまださ青し夜霧立ち香に立つ稻の
その葉さやらふ

ここの田の穂の垂り見れば月の夜やただに夜
霧のむすびつつあり

十六いざな夜よや月夜高きを濃き霧の煙幕の幅引きに
つつあり

§

蓆むしろ戸どやしまく夜霧をありありと灯ひは赤く點つけ
て芝居うつ子ら

ひといろの松蟲の音とぞなりにける夜霧ふり
下くだりここは松山

月に行く新にほ懇ま道みちもたどたどし夜霧たちなびき
伐りのこりの松

霧ふかく月もとどかぬわが前を影あやしかも
歩あきてぞをれ

この月をアングラ兎飼ふ家は霧ふかくとざし
早や夜中なり

月
明

草くづに見えて啼き澄む蟲のひげ月のひかり
は水のごとあり

床と下したに月の光は射し入れり球根が見ゆ數あか
る蟻

II・水
の
鱗

冬山の枯山來ればいさぎよし甲にひびきて何
 か研る音
 雲間洩る寒き日すぢとなりにけり遠々に見る
 雑木々の立

枯山

水上

石ばしる水のかかりの音立てて紫冷やき龍膽
 のはな
 日のうちも狭霧こもらふ水上は紅葉さし出て
 冷やき岩室

枯山からやまにはらら飛び交かふ小さき蝶ちょう黄翅わうしせせりの
影ぞ生きたる

この道の朽葉くは下凍したじみかそけさよあたる日射の
それも寒けさ

寂さびびつくししかも明るき端山はたま木きや時にはらら
き日ひざしかがよふ

§

冬ふゆまひる雑木ざふき端山はたまの日あたりを吹きあふる風
の音のわびしさ

雑木山ざふきとよもす晝のこがらしはかうかうと寒
し空へ吹きぬく

冬の土

庭の土風に鏽だつ冬の曝れ鼠小走りただち隠れぬ

目もすまに凍みつつ玄き冬の土玻璃の缺片すら光りかへさず

冬の土こごりきびしくなりにけり球根を埋めてにじむもの待つ

冬の土ししみ搔きたる種床にひとりさやけさや白き猫ゐる

種床にうづくむ猫の今朝はゐて時ならぬ白き華ぞ咲きたる

霜

野にあれば季よきのうつりのしづかなり霜は明ら
かに人はすなほさ

三冬月谷地やちの畠はらのとりどりに霜置き足らし我
ぞ歎ける

霜しも疊かさね清きよにましろき萱あやの枯れ我が起き起きの心
きびしさ

霜と言へば雜木ざんぼくの竝木ならび染しみつくす田川の岸も
目に緊しるなり

霜は今はいたりつくしてしづかなり畦あぜつたひ
來る庭鳥のこゑ

歳の暮に

形ばかり門かどに小松はうちつけてただに來向ふ
春を待つわれは

篁あしを松をこの家いへに常に見てわが足れりけりな
にぞ今さら

竹山

竹山はおもての小舎こゝろの藤戸ふじのに日のあたりゐて
寒き物音

篁あしの外とほに積む稻は乏しけど唐辛子からし赤く掛けつ
らね干す

冬の水

冷^ひえちぎり洗^うふ大^{おほ}根^ねをその葉^かさへ寒^{かた}の素^{もと}水^{みづ}に
われは見^みつくす

冬^{ふゆ}はいましろくさやけき蓮^{れん}の根^ねの紫^{むらさ}ひかる切^き
口^{くち}の孔^{あな}

うち沈^{しづ}む飯^い粒^{つぶ}見^みれば冬^{ふゆ}の田^いの後^{のち}ゆく水^{みづ}も冷^ひえ
とほりけり

常^{とこ}無^くきはいよよ清^き明^{めい}けしさらさら冬^{ふゆ}の淡^{たん}水^{みづ}
もながれ來^きにけり

冬^{ふゆ}の水^{みづ}いさら小^こ川^{がわ}の日^ひに透^{とお}きて影^{かげ}うごく見^みれ
ば流^{なが}れつつあり

冬の田

裏の戸

群むら鶏どりの白しろき鶏どりゐる背戸せうどながら田いにはけざむき
影かげばかり見ゆ

晝ひるの閒まも冬の田いの面おもてはけざむくて何か凍こみつ
つ影かげのかぐるさ

氷雨こりゆふる

冬の田いの門かど田いの泥どろにふる雨あめのこの夜よ氷雨こりゆの音ね
立てにける

朝の田に澄みつつあかる水のいろ昨夜の氷雨
かふりたまりたる

冬の田よしきり光れど日のうちもおほにかぐ
ろくさむき稲莖

冬眠するもの

冬の田のこごれる泥にすむ魚の蛙の蛇のこゑ
もせなくに

土ふかく蛇はひそむととろほろと眼もつぶる
らむ食べはせなくに

聲は無しただに月夜の田の泥におのれ身がく
り冬眠るもの

足跡

冬の田の足跡見れば入り亂り氷雨たまれり深
き水の田

氷の鱗

冬の田は稻ぐき黒き列竝に鱗だちたり美き氷
張り

冬の田に月の光の來るとき稻莖は見ゆさざら
薄氷

冬の田の深田の氷罅びわれて月の夜頃はよく
光るなり

冬
夜

襖ふすまには猫の物食はむ大きかけ夜寒さむひそかに吾れ
も食はみをる

白き猫繁しほみ身動みぶぐ毛のつやのしづかを霜は外と
にくだるらし

怪しく閑しずけかりしか夜明がた忽たちまちを霜の大いに
到いたり

眼を病みて

冬の夜のストーブ守まもれば我が行きし沙漠をぞ
おもふ駱駝の足音

夜は深しただにしづけくゐるわれをストーブ
の熱^{あつ}り痛む眼に来る

時ならず寒き夜ふけにとどろくは軍需品はこ
ぶ貨車にかもあらむ

聴くものにはらつく冬の雨ながら月夜なりけ
り眼鏡拭きをる

雨と雪と

雨まじり雪かふるらし夜のふけを音^ねには立ち
つつ眼には白かり

うすうすと夜目にも雪ぞつもりけるあたりは
いまだ雨の音して

早春月夜

うち騰^{あが}り月は圓^まけき向う岡木の立寒し未^{まだ}しき
さらぎ

浅夜にはかすむ月夜も夜ふけにはただにわた
りぬ^な互^あえかへりつつ

早春の水田

前の田は乾き乾かぬ稻莖に日のあたるのみい
まだ冬の田

田の水につづる氷の薄ら罅^{ひま}春の日ざしは照り
そめにける

水の田に薄^{うす}氷^こただよふ春^{はる}さきはひえびえとよ
し映^{うつ}る雲^{くも}行^{ゆき}

刈^{かり}かぶや黝^{くろ}き稻^{いね}莖^こ水^{みづ}ひかすひたりつくして冬^{ふゆ}
もをほりぬ

春^{はる}すでに刈^{かり}田^でに黒^{くろ}き泥^{どろ}の面^{おもて}のふくらみ柔^なしう
ちにほひつつ

うちはすみにはふ青^{あお}みや兵^{へい}ふたり歩^あのそろひ
をり田^でに映^{うつ}るかげ

長^{なが}かりし冬^{ふゆ}のねぶりよ土^{つち}いでて蛙^{かえる}は水^{みづ}にまだ
もとろみぬ

田の水光る

楮山芽ぐむ春日を水田にはまだひえびえと風のさざなみ

田の水に來寄るさざなみ刈株の列竝のまに光るさざなみ

寂しき春

寒くのみいまだけぶらふ雑木原あゝむらさきに照る日かげりぬ

うち澱み春は病ましも水の田に映る曇の日を透かしつつ

蚪
蚪

猫やなぎ花はせそめて田川には蛙子かへるこ生れぬ繁しほ
みかへる子

揺り泳ぐ蛙子かへるこ見ればくろぐろとひたり水漬ひき
ぬ底に群るるは

雨づつみ

雨づつみ薄き田の面の上清よほにおたまじやくし
はよく泳ぐなり

かへる子はしじに濁せど道つけて薄ら水のる
春の田の泥どろ

雨あまづつみにほへる見れば紫雲英むらさきぐも田だや春の日永
はよくふりにけり

春の田

春の田にうつら啼なき出る墓かぶつのこゑえごの本の
芽もひらきたるらし

萌もえいでて柔なき木の芽の或あるは白しろうかがや
けり花かともあはれ

庭つ鳥あそぶ田の面に咲く花は野芹ののげんげん
馬のあしがた

鶏けいまじりあそぶ野鴨のの埒わなさよ水には入らず
紫雲英むらさきぐも田だにゐる

春の田にしじに開けゆく芹の花しろき鶯鳥の
頸根伏せたる

春菜莢やけむる嫩芽を田川には鶯ひとりが行
き戻りつつ

田の塚は映る楮の叢嫩芽この閑けさをいまだ
塞きたる

光なき空

霾らす春の嵐はとよもさす雉子鳴き立つ聲ぞ
とよもす

霾らす風あし見れば吹き亂りひと日濁れり光
なき空

初蛙

吾が門よ夜ふけにきけば春早やもかはづのこゑの立ちてゐにける

初蛙つゐ鳴くやいづらと窓あけて耳とめてをり月のぼるに

§

春じめり馬頭うまがしら観音の小夜ふけて立ちそめにけり田蛙たがはのこゑ
くくと啼きころころと繼ぐ蛙かはづのこゑ織たき月夜
のものとし聴きゐる

鐵兜

菜の花に眼のみうかがふ鐵兜童なりけり敵は
あらぬに

爆彈三勇士を憶ふ

廟行鎮はきさらぎさむき薄月夜おどろしく三
人爆せにたるはや

汲みかはす水盡きにけりいざとこそ立ちにた
りけむ思ひきはめぬ

鐵條網にいたりすなはち爆せ死なむ命なりひ
たひたとそろふ足音

ますらをや命ある間と口火燧り爆薬の筒はい
たはりぬらむ

灼きつくす口火みじかしひた駈けに爆せて碎
けて果てぬべき兵

ますらをはかて期したれ行きいたり火と爆
せにけり還る思はず

筑紫の我が不知火のおぎろなき氣性このごと
し爆破し止んぬ

突撃路あへてひらくと爆薬筒いだき爆せにき
粉雪ちる間に

薄月夜とどろ火の發つたちまちをおのれ爆せ
飛び兵微塵なり

兵士はしかく死すべししかれども煙はれつつ
その影も無し

麻布第三聯隊

七年春、麻布第三聯隊の隊歌作成につきて、秩父宮殿下
に再三拜謁し、歌詞成る。作曲は山田耕筈氏なり。軍歌
としての新聲騰り、光榮身にあまる。その時の歌。

賜詞の日

秩父宮召したまふなりあなかしこ麻布第三聯
隊に参るのほる我は

早や早やと召したまふとよ我が足ども踏處さ
だまらず營門を今は

わが君は直立ちおはし御眼鏡にほほゑましけ
り此方見まして

最敬禮して眼がしらあつくなりけりすがす
がしとも若やかに坐す

麻布第三聯隊春まだ淺しうやうやと心ひきし
まり高きにのぼる 屋上展望

隊歌發表式の日

五月十六日、隊歌發表式あり。偶ま犬養首相の兇變の翌
日なり。この日参向、營内の道場にて撃劍の試合あり。
我が椅子は一段と高きところにしつらへあり、中隊長宮
に隣りまゐらせたり。あまりの畏こさに御後べに退りて
扈從しまつる。

兵士はうやまひあつし竹刀とりお前にとうと
聲徹り撃つ

激しくうちあふ竹刀眼には入れこの畏こさに
面も小手もわかず

營庭にて三聯隊の兵全部凹形に整列し、隊歌を合唱す。
宮殿下もその列中にあらせらる。聯隊長と、作歌作曲の
両者は北面す。風やや強し、聯隊長の訓示の後、合唱の
聲大いに騰る。

營庭の老木の櫻過ぎにけりわれは立ちつくす
光る眞土に

立ち待つと心澄みある晝さなか兵あらはれて
來り列竝む

わが前に歩兵第三聯隊並び立ち隊歌うたふと
聲大いにあがる

葉ざくらは風やや強し耳とめて宮の御聲を聽
きまつらくは

夜宴あり。將校一同列席。メーン・テーブルの中央に殿下おはし、我が席は殿下に對ひまゐらす。畏れ多きことかぎりなし。聯隊長には上海よりの凱旋將校對座し、山田耕筰氏その左に在り。わが作るところの隊歌、民謡「歩三の春」數次合唱され、少壯將校たちの氣焰亦當るべからず。この夜、無禮講とて御手づから御酒賜ることしきりなれば、初めはひたに恐懼しまつりたれども、後には陶然として、わが歌謡など御耳に入れ奉りぬ。

瓶子びんじとらせ御酒みしはたぶなり御さかづき持つ手
ふるへて泣きをりわれは

あなかしこ宮のお前に頸根くびねつきなんぞほのり
と酒の乗り來る

この御酒みしや臣おみもささげて酔ひにけりゆるした
ばりて歌ひけりのだに

春の夜は闌たけにたらしもみさぶらひ遊ぶ今宵
も闌たけにたらしも

我が歌

うちつけにただに胸うつ歌ならず心ひそめて
我が歌は観よ

命いのちなりありのままなる観かんのながめひそ秘ひそ密みつ莊しょう嚴げんの
相すがたしぞ思おもふ

III
・
夕
菟
雲

苺 咲く

いささかは庭の芝生のふちどりと苺のしろき
早咲きの花

初夏の畑

麥の間に植ゑて肥やる茄子のうね麥は穂に立
ち茄子の花はまだ

蠶豆の裏吹く白き晝の風ものの氣遠く夏はさ
みしさ

夏すでに穂麥にからむ晝貌の蒼よちれて花二
つ三つ

玄
土

このあたり田植おそし、馬は印旛沼地方の事果ててより
借りて来るなり。この夏ことに遅れたり。

玄土は光とほらす物の根の下凍ふかし春来る
なし

玄土のなじまぬ土の畑つもの季遅れたり白南
風を而も

玄土は眞土ならねば水入れて深くぬめるなし
早稻田根づかず

蛙鳴く草田のいきれたがやさす梅雨は向へど
馬も借り来ず

玄土の小田よ十代田栗の穂の光しらけてやを
ら代搔く

代搔しろかきの真夏來れり出でよ出でよとみに見え
たり玄土くろつちのほけ

耕田遅る

まだ鋤かす狭田さだの田岸の鴨萱の根を泳ぎつつ
蛙らはゐる

青日射あおひしげき莠あやの下草に音は立ちにけり早き
蟲の音

夏の田やいまだ鋤かねどぬめり田のむらさき
の泥光りまされり

草ごみに荒く切りゆく田の土は犁すきの双は型の紫
の塊かたまり

夜々、蛙を聴く

藁床に起きてなげけば蚊のこゑも立ちてゐに
けりころろ夜蛙かはつ

楽しみと蛙聴く夜の水口みづぐちは水も遊ぶか音ちよ
ろろゆく

庭前小景

青梅の幹搔き立つる母の猫仔猫は飛べる蝶を
見あげぬ

野茨いばらはいとどしろきに層厚かさき薔薇ばらは濡れて肉
いろの花

鐵鈷雲

黄金こがねの鐵鈷雲てつこの巨おほき雲ぐもただに押し騰あり晝ひるは久ひさしさ

入日蔽いりひかげふ鐵鈷雲てつこは雨雲あめぐもの下したふらしたりすごく焼やけつ

§

眞東まひがしやただに反そり立つ巨おほきなる鐵鈷雲てつこは一つ根ねの雲ぐも

日のさかり鐵鈷雲てつこの傍わきあがる神立雲かんだちぐものおどろ三さんつ峯たかね

深大寺

立雲に雷こもる傍空風前しるしこのまつか
せ

黒南風にかがよふ群の青杉は嫩芽ふきたつ深
大寺の森

夏すでに黝む青葉を揉みあふる梅雨の風ふか
し押し移る雲

この庭や後ろ遠きに日はさして枇杷の喬木の
明き實の數

閑かなる庵やと観て仰ぐ眼にまるまるとよし
明る枇杷の實
庭に小亭あり

庭苔の強き日射を時隔かず散らひ舞ひ來る細
き葉や何

花よりはこれの一木の鏡葉の照りかへし日を
白しとを見る

泰山木に花ひとつ残り

水冷やきこのお池のところがみ眺め足らは
む肘枕して

深大寺松風ひさしこの隠る黒南風はくらしけ
だし夜に入らむ

大葉栗しろくなだるる花群は深大寺出でて布
田へ行く道

鳥居には一木栗の木花さはに穂に咲き垂れて
代掻きの馬

梅雨にこもる

梅雨の霏おほに蒸し立つ日ざかりはくるしか
りけり野に隠りつつ

ふなると啼く夕闇蛙家垣の檜葉のしづくか食ら
ふなるべし

食用蝦蟇

洗足池のほとり食用蛙を釣る浮浪者殖えたり、一匹の値
五圓なりといふ。

池の下茅萱うちひたす出水には食用蝦蟇か夜
ただ吼ゆらむ

池尻に食用蝦蟇を釣ると来てあはれあはれ空
し人かがみをる

老蛙子蛙

老蛙子の蛙とし鳴くならし夏めきにけれやに
ほふ闇の田

老蛙田蓑著て鳴く梅雨の田を子の蛙らは泳ぎ
すらむか

或る門前

むくろじは花ちりしける白土しろつちに雀鳴き立つ梅
雨あけの照り

梅雨つゆあがり代搔かきをへし水の田に新麥あたらしく藁わらの鳩
が映れり

宵月

無線塔とわたる月のこなたには蛙が鳴きて植
田すず風

敷藁や月夜清きに南瓜かんぼろの黄なる花さへ照り白
く見ゆ

地靄立つ蒼き月夜の草堤ひとり
二人ゆくは行かず子ら

夜聲

梅雨霽はれのあをき月夜の白小雲遠く犬の聲のう
つくしく發つ

吾が窓よ月に開けば刈りしほの穂麥の矢羽根
風そよぐなり

代掻しろかきて水も足らふや夜は蛙かへころろ樂しめり
玉ふくむこゑ

雷雲

黒南風くろなまかぜの風さき見れば雨雲あめぐもに雷らいこもりつつ青
き田のいろ

夏眞晝なつまひるとどろ閃めき押し移る雷雲らいぐもの層かさは拱居あぐら
て観む

雨雲あめぐもにやますひびかふ物の音夜はまだふけず
赤く濁る月

路上の照り

前歩む子らが頸根よ滴り落つる玉の汗見れば
よく灼けにけり

揺りひびきしづけき山はよく聽けば分きしぐ
れつつみんみん蟬のこゑ

夕雲二景

あやに飛ぶ雲のうへ引くすぢ雲は夕光にして
さらに氣遠さ

かぎろひの夕莢雲は蝸の啼く間も早し邊に消
つつあり

紫芋

楯竝めて群立つ芋の高莖は紅すがし下透かし
つつ

莖高の芋のひとつ葉風吹きてひるがへる見れ
ばすべる白露

秋の風さわたる見れば高畑や幾畑となく芋の
葉の群

芋莖や騒ぐ立葉の風傍も早や色づきぬ早穂田
粳稻

朝曇うすらすすしき水の邊はすゐき積みたり
あかき芋莖

牛

日おもてにひた黒の牛立てりけり深くうなぶ
し見るとなき目見

道の幅俯居る牛の傍よけて歩み來にけりひた
堪へむとす

風を見る牛のまなこのしづけさよ秋づきにけ
りうつくしき稻

ただに射す夕日や牛の横臥して臉の蒼蠅しば
たたきつつ

大黒オウゴウの雄牛の尻毛卷きにけり夕風亂りほそぼ
そと見ゆ

艶黒ウツクシクの穩ウツクシしき雄牛うなじ垂り日の夕かげは曳
かれけるかも

この道に静けき牛のありしかと還りるにけり
ほそき月の夜

夜は起きて

この谷地ヤチ冷ヒヤはなはだし夜は起きて月夜すが
らに雲の行見ゆ

夜に起り荒く息づく風音カザネはまがふべきなし耳
を放たず

月の前おのれ消えつつ飛ぶ雲の後來たる閒の
空のすすしさ

山蟬か蓋し魂ざる雲いでてただち梢にひた明
る月

雲迅し月に逆らふしばしばも後夜はあはれに
裏あかりして

大森區

本門寺

扁額は大虚庵光悦の書なりといふ

おほらかに本門寺とぞ讀まれたる日のくれぐ
れを仰ぎゐる我は

本門寺日の暮れかかる眞正面はひろびろとあり
寒き石段

赤松はけだし閑けしつれづれと惣門を來ては
ひるこの庭

本門寺裏の切通しをどらいぶして松おほき山
の寒きに向ふ

洗足の池

まかがやく日の位置低し空は觀て西かとも思
へど南とも見ゆ

波 わが來り片附く水は池尻の築石垣のさむき夕

蛸たこのむれ夕日にきほふしまらくは赤松の幹も
 暮れがたみあり

冬晴の夕日に照らふさざら波洗足の池は木の
 まより見む

池の面に沁みて光るは丘の家の硝子戸の冬の
 日の反射ならむ

ひたおもて水にかぎろふ夕ゆふ光ひかりのひと幅の動き
 我にとぞ來る

み冬日や黒くあらはに短艇せうてい漕ぐ影二つありて
 かぎろふ夕波

この池や広く明きに我は見てなにをかも憎む
 漕ぎある憎む

軍 鶏

若冲の畫を観て、心神相通するものあり、乃ち我も亦、

この軍鶏の勢へる見れば頸毛さへ逆羽はらら
げり風に立つ軍鶏

雄の軍鶏は丈いさぎよし肩瘦せて立ちそびえ
たり光る眼の稜

冬の土に昂然として立つ軍鶏の鶏冠火のごと
し流るる頸羽根

一羽あれば胸高軍鶏の雄の鶏も後向けりけり
はらめく尾の羽根

軍鶏の立しづかよと見れ蹈むただち蹴爪くひ
入る霜ばしらの土

IV・父
母の冬

鶉飼

わが父はつれづれの翁おきな、鶉飼うづりかひひめもす飽かず、鶉籠め雌をと雄をとさし寄せ、行き通へよく番へとぞ、い坐すわると、膝ひざに肘張ひじり、眼まなこを凝こらし、ただにおはせり。眞白髯まじろかき垂たる老おいの、この姿すがたひと日ひもおちず、生なめよ殖かえよよく番へとぞ、日ひあたりを冬ふゆはよろしみ、端居はなますかも。

同じく

摺餌すり搔かきただにみ冬ふゆを家いへごもり番つがふ鶉うづりを見て守まもらすなり

ま寂さびしき父ちちと思おもはめや日ひあたりを鶉見うづりみ守まもりひたぶるに坐すわす

み冬日は愛し鶉ものどならず行きはかよへど
 よくは番はず

とまり木の捲毛カナリヤ聲揺らす冬をこごえ
 て眼はあけてをり

おもほえず父の薄眼のたどたどに日月も知ら
 ずなりまさむとき

信心

わが父は信心の翁、み目ざめはあかつき闇、
 口嗽ぎただち拜み、珠數かぞへ南無妙法蓮華
 經、かがなべて朝に五千、午過ぎて夕かけて
 三千、湯を浴み、御燈明點け、残りの二千、
 一萬遍唱へつづけて、真正しくひと日もおち

す、國のため、祖先のため、その子らがため、
 わけても子らの子がため、ただ唱へ南無妙法
 蓮華經、いとほしと口には宣らね、嚴かしさ
 またただならね、ひたぶるのこの親ごころ、
 その子我、仰ぎまつりて泣かざらめやも。

同じく

日をひと日夜も乞ひ禱みひたごころ守らす我
 等が父ここに坐す

愛兒我などかたゆまむこの父の夜もおちす通
 ふ御聲とほれり

わが歌はわがものならず祖先神くだし幸ふ言
 靈の揺り

父のこゑ澄みぬる際やうつばりの塵ひとつだ
に聴きものがさす

魂むすび父とその子の相合へば言には揺らね
ただにかなしさ

ほのぼのとおはしませばか尊くてこの頃父の
老のよろしさ

宵寝

わが父は八十ちかき爺、國いでてすでに二十
とせ、この頃は夢に立ち來と、亡き友の夜ご
と寄り來と、樂しよとひと夜もおちず、よく
寝むと衾かつぎて、今宵はも何の誰か來む、
早や待つと、すぐに寝ましぬ、友無しにして。

たけ高き母

わが母はたけ高き母、まさやけくさびしき母。
 おもてだち學びまさねど、僞らず、正しくま
 しけり。み眼清く切長くます。やさしきは夫
 にのみかは、その子らに、その子の子らに、
 なべて愛しく白髪づく母。

わが母

わが母はシゲ子、石井氏、肥後南關はその里なり。

母の國墨磨川の水上の山の井近くしだるゆづ
 り葉

わが母や學びまさねど山水のおのづからにし
 響きたまへり

わが母はこころ隈なしまさやかに御眼明らけ
く切長くます

わが母はあてに清明し山の井の塵ひとつだに
とどめたまはず

わが母はよにいさぎよし高山とたとへて言は
ば雪割の花

手習ひ

わが母はつれづれの姫、永き日を子らが名書
くと、手習らふと、たどたどし筆と墨や、そ
の文字は父に習ひて、隆吉・鐵雄・家子・義雄と、
その子らが名。愛し母この母思へば、赤石の
硯の海のふかさ戀しも。

老の賀宴

昭和七年十一月五日、父の喜壽と、母との金婚式を祝ひて、一門その膝下集る。

1

かがなべて老の齡のたふとさよ七十路あまり
いよよ七歳

よき翁父の寂びたる老樂は市中ながら山の手
の松

こきなでてゆたけき父のましろ髯いや搔き垂
らせその膝までに

おもほゆれ相者ならずも我が父のみ命は長く
豊に寂びつつ

金婚の父と母とを言祝ぐと子ら舉り來てつど
ふよろこび

金屏の灯映見れば父と母並びおはしていよよ
たふとさ

父に添ふ母の今宵の影見れば永くも添ひて舊
り來ましけり

よき翁よき嬭と・しうち並び笑ますこの夜のあ
てにをさなさ

父と母並びいましてしづけさよ七十路越えて
二柱なほも

うちそろひて老づく子らを父と母世にますこ
とのありがたく泣かゆ

童わらへより四十路五十路と父母を仰ぎ來しもの正まさ
眼めかなしく

わが母のいまだあえかにましまして父のみも
とのぼんたんの花 庭にありき

嘖ばえて

わが父はさびしきひと、富み富みて失ひしひ
と、傲りかに育ちふるまひ、五十路過ぎよ、
郷こを離れて、年老ゆと、心弱ると、すべなみ
と子らに頼たらしぬ。この父ぞこの日を、子の
我と酒めせばか、秀はに出でる荒み靈。思はぬに
うち勢きはひ嘖こばしにけり。嚴いかしく昔の父 お

もかげに今し立ち、スハヤク潔しわが父やげに、昭和
八年一月元旦、父の子は我は、嘖ハハばえて涙し
ながる。

§

童わらわぞとまだおほせれか一聲に喝かとぞ嘖ハハばす白
き髯ひげの父

言こと過ぎて嘖ハハばえにけり何ぞかく父の尊のおそ
ろしきや我に

嘖ハハばえてまかり還ると夜は寒しこの元日の星
の照りはも

嘖ハハばえて父と思へばいさぎよしよくこそ強く
生きたまひけれ

老
樂

父と母性合はず、さびしくまじき。若きより
悲しかりにき。今老いて、七十路過ぎて、さ
らさらに何の事なし。頼りなく頼りますかも、
まさびしく閑けかるかも。朝に夜に、茶のけ
むりほのぼのと立てて、在り對ひ坐す、これ
の老樂。

冬
の
日

老らくのながき朝夜のわびごころただに對は
し寒きこの頃

父と母冬は南の日あたりをただによるしみ常
二階に坐す

V・月の魚眼

霜に行く

上乾くもろき皮膚や立つ霜の光る柱はさくり
さくり踏む

朝北風を帽ひきかぶり出あるくと松原越えて
寒しいよいよ

卓上燈

反射燈更闇けにけり我と在る球面の影の冬は
きびしさ

煙筒に風の吹き入る音きけば雪解はいたも騒
がしくあり

梅に寄せて

昭和八年二月二十七日の夜、與謝野寛先生の還曆祝賀會
を東京會館に開く。その折、梅に因みて献げたる歌十首、
但し各人同題なり。

讚へ言うち舉げむよはまのあたり今日をさや
けき白梅の花

久地梅林の梅に

君がため未明に起きて梅のはな見に來りけり
まさやけき花

來り見て涙しづかなり梅のはなかくはこもら
ふ露にこの花

白くのみ光こもらふ梅のはな松の木群ぞうち
かすみたれ

晝の靄うちへだて見れば梅のはな紫ふかき枝
に照り交ふ

咲きにほふ老木の梅のこぼれ日は花おほきか
らにうつくしき影

再び梅に寄せて

よき人の道のあゆみはとどまらず白梅はくばいの陰を
入りて出たまふ

梅の花にほふ南のゆふがすみほのかに老おいにい
たりたまへり

ぬくみ

日のあたりなにとなけれど春もやや立枯草の
叢根かがよふ

ほのぬくみ明る真土や追ひぬけて鼠見はなち
猫のころぶす

水邊早春

葦かびの角ぐむ見ればあさみどりいまだかな
しき宇麻志阿斯訶備比古遲神

春はまだ寒き水曲を行きありく白鷺の脚のほ
そくかしこさ

蛙子の生るる頃

春早き田の面の水皺しわ風吹けば流るるがごとく
動きつつ見ゆ

春いまだ墓ひきのたまごも田川には水み泥どろかぶりぬ
揺りうごく紐

紐解くる墓ひきのたまごにくるぐると今はしみみ
にはすむものあり

ほかならぬ子らを思へばかへる子もしじに生あ
れつつ水に揺ゆれ出でぬ

かへる子ぞ繁しに生あれたれこの水を親のかへる
の影ひとつ無し

初蛙

四月五日夜、ラヂオのニユースは米國の大航空船アクロン號の墜落を報ず。

雷とどろき裂くるすなはち天翔るアクロン號
はほろびたりけり
アクロン號とどろほろぶとも夜に聽きてころ
ろうつくしき田蛙のこゑ

耳聴き子らかなやあはれ夜に聽きて蛙啼くこ
ろろと啼くよと聽きをる

木の芽立かをす雨閉の夜ごもりに蛙は啼きぬ
まだくくみつつ

冬を眠り春は起き出る田の室のぬめり蛙か覺
めつつあるらし

遅日

田川にも墓の子満ちぬいざ子供卯月八日の花
菜摘み來な

このゆふべたとへしもなくしづかなり日は明
らかに月を照らしぬ

春朝

ある朝、縁側の姿見の卓に花瓶を置きて海棠を挿したる
に、鶯の來てとまりたれば

春はいまけむる小雨のものならし鏡にこもる
うぐひすのこゑ

濕り田

濕り田よ春は田の面の下萌に油ながれて日ぞ
光りたる

投げ棄てを燕花咲くここの田の見のあたたか
やまろき根燕

麥秋の頃

藁のこゑ野天にひびく午ちかく焦いろの風も
麥あふり吹く

熟麥の大麥の穂を照りつくる六月の日射くら
きがごとし

刈しほの濃きは淡きは
大麥と小麥にかあらむ
裸麥もあらむ

焦いろの盆地の麥に立つ
靄の夕あかりながく
蒸しにけるかな

風おもていとどかぎろふ
ここの野は麥ほこり
立ちて言ふばかりなし

§

白南風の軍用道路はてもなし
竝び押し來るカ
キ色の兵

麥の秋目も病ましかもとどろ
來る戰車かぎろ
ひ砲つづく見ゆ

亂れ立つ電柱見れば黄の麥や段畑の上にあがる白雲

立雲よ野外教練の子ら行くと銃はかつぎて足亂れ踏む

熟麥や月夜ひさしき砂利路をもそろ這ひ入る
大き蝦蟇あり

草堤にて

人ゆかぬ荒玉水道草ふかし音に老けにけり隣
田の墓

あさみどり標ゆひそめし早苗田の苗閒の田水
のりにけるかな

蛙を聴く

草ごみに鋤きしばかりをのる水の蛙かはッにはよき
雨ふりにけり
地にひびきしげき蛙を夜ごもりに觸りてゐに
けり耳に蛙を

田の蛙けしくしづもる時たちて音亭りけり深
き夜の地震な

田に満ちてしげき蛙はよく聴けば子らが小床せど
に呼び鳴くごとし

草堤子らと歩あきてこちごちに聴ける蛙か夜も
すがら鳴く

くくみ鳴く藁ひきのこゑきけば草ごもり夜の眼光
らす田の水が見ゆ

ひとつゐる濁なま聲蛙かはら泥どろの面おもてのうすら上うへ水みづも夜ふ
けつらむか

ナチスは書を焚やきにけりかはづ聴くこの夜よ深ふか
にしひびかふものあり

竹若葉のころ

あさみどりよにもすすしき一色は竹の若葉の
ひらきかけの頃

幾群いくぐんと竹の若葉は萌えそめてこなたなぞへの
馬鈴薯の花

草堤白日吟

草堤空梅雨ひさし子らと行き妻と行きつつせ
つなくおもほゆ

篋子や黒き女童草閒ゆく腕も脛もよく灼けに
けり

青萱原尿放つとこの男の子父と並ぶか早やい
さぎよし

爆音密雲にとどろけりあはれあはれ草いきれ
しるき中より仰ぐ

息ごもり風は流れずこの妻と夜に見し草の深
きに見入る

雲は蒸す

夏霞おほに蒸し立つ野平のたつらをふきあがる雲ぞ低
くかがやく

白光びやくくわうの蒸しつつこもる空にして雲の奥渡る黝くろ
き鳥あり

白き雲びやくけふかき雲を彌ひらが上に雲は噴ふきあがり
まかがやく縁へり

§

蒸しにけり白き南風みなみかぜを月かとも氣球うかびて
夕あかり空

六月七日浅宵

川端千枝女史告別式の夕、通知入手遅れ不参。

圓けくて肉いろの月おぼろなり
白南風あけの
芽蝸のこゑ

身をつくす炎なりけむか老いつつあはれ激し
くぞ戀したりてふ

夕かげを月は光らず眼前や電線の張りをはな
れつつあり

村藪はまだ暮れがてぬ靄ながら月高くのぼり
けんけら棒の音

無線塔相對ひ立ち夕風なり暮れやらぬかなや
月ものぼるに

雨夜雲噴き出づる月の角見えて鏡かりけりか
なしき光

§

藤の棚に雨の音しげくなりにはけり光りたりし
かさきほどの月は

積 亂 雲

積亂雲とどろ噴き立つ日のさかり人參の花に
我は思はむ

眞平と根に湧きあがる巨き雲鐵鉦雲ぞ吹き亂
れたる

庭前小情

七月二日

電柱と支柱が近き眞日照りは諸葉しなへて酸
き豊後梅

立雲の怪しくかがやく日のさなか蟪蛄が番ひ
雌は雄を啖ふ

下草を而も日照りに眼を射るは山百合のしろ
き裂長の花

よく光る百合の花弁や一莖に花は二つひらき
照り合ふその影

頸長の鐵砲百合は日に向くと鉢ごとに白く突
き出すがしさ

立莖のしろく粉こなふく竹煮ぐさ廣葉わき立ち穂
には數かず花はな

山椒の葉摘みつくしける庭に出て空梅雨かづめのあ
けをしみじみ感ず

藤の棚蔽ひあまれる藤の葉のそよぐ影見れば
照り透く葉もあり

七月八日夜、即興

大きタオル黒き裸はだか身に巻きつけ來る女童わらわ篋か子
そだたきやらむ

母を虐いじめぐるこの男おとこの子よしつくづくと父はは
ばかるをこの子は成しぬ

556

夜明けに白馬ヶ嶽へ出で向ふこの子と思へば
うやうやし母と

驟雨、即興

葉洩れ日をただにすすしと下草に見つめるに
けりそよぐ光を

張つよき山百合の蕾うちたたたく驟雨なりただ
ち霧たちのぼる

深き酒せちにつつしむこの頃は脾腹にひびく
なにもものもなし

すばらしき雨あしの長さ岡の上の林より盆地
の青田へ走る

557

豪雨とみにおとろへて金蓮花の濡色あかし蟹
のごとうごく

吾が子らを心に思へば神立雲光り閃めきぬは
たためくは後

よく冷やして冷やき麥酒はたたき走る驟雨の
あとに一氣に飲むべし

たちまちにして歌成るこのよるこびを妻に言
舉げて我がくちつけぬ

或る朝涼

共産主義者轉向すと聞くこのあした白鷺ら飛
べり青き水田のうへ

晩夏小情

照りつづく夏もいぬるか肉厚く雲うかびいで
て今日も蒸したる

壁^{ひだ}ふかく光こもらふ黄金^{こがね}雲^{うも}蒸すからに巨^{おほ}き二^{ふた}
つ牡丹花

いまだ夏布團の綿は日に干して雲よりも白く
光りたりけり

日のひかり強きさなかを黄の泡のほのぼのと
立つをみなへしの花

切石にうづくむ猫のねちねちと腋毛^{あきげ}つくるふ
をみなへしの花

ひたむきに閑けかりけり日の方や向日葵の葉
ぞ灼けつくしたる

花いろのなにかうち透く雲ゆるに立つ秋風も
うすら涼しさ

向日葵や葉裏にさがる紋白蝶の夜は翹ばたか
ず宿りたりけり

庭前立秋

風前に朝居るしろき積雲の下空あをみ今朝は
すすしさ

無線塔うつろふ雲の騒立てば眼にとめて涼し
秋來りけり

油熬る蟬の鋭聲は繁ながら立秋を今日を涼しくおもほゆ

垣くぐる尾長の猫の子を連れてほそり目に立つ
桔梗の花

互生葉の栲の瑞枝風立ちてその涼しさはかぎりなく見ゆ

藤の葉にとほる日ざしのすすしきは栲の葉分
く風そよぐなり

ひらひらと風に吹かるる黄の揚羽蝶立秋も今日
は二日過ぎたり

電柱に裏吹かれゐる蟬の翅の飛び立つと見れば
鋭聲断れたり

白
緑

晝さなか駈足の兵續きゐてキャベツ畠の白緑シタミドリ
の風

白みどりよく植ゑ竝めし葱の秀はを蜻蛉あきつは飛べ
りほ迅きその翅は

或る夕光

角畑すみはたや茗荷にあかる西の日の黄にかなしけれ
ば我は観るなり
木下道きしたみち夕日さし入り流れたり亂れ立つ蝶の何
に驚く

向日葵童子

わが庭の向日葵つひに伸びず、一列にして小さし。童子のごときそのさまや。

丈^{たけ}ひくき向日葵^{ひまわり}童子^{どうじ}うちならび直^{ただ}に射^さす日に
面^{おもて}あげて佇^たつ

日^ひに向^{むか}ふ向日葵^{ひまわり}童子^{どうじ}前^{まへ}なるがいといと小さし
面^{おもて}直^{ただ}にあげぬ

ある午

日^ひのさかり草堤^{くさづみ}來^きる聲^{こゑ}はしてよく聽^ききてゐれ
ば我^{われ}が名^な指^さしをる

我^{われ}が家^や言^いふ行^いきすり人^{ひと}の聲^{こゑ}高^{たか}をひそみるにけ
り暑^{あつ}き日^ひなかを

十六夜

照りいづる月は魚眼のごとくなり吹きながす
 雲よしろき水脈立

照り強し月の面を撲つ雲の眼には裏べを立ち
 のぼりつつ

月夜なり低くかぐるき丘の脊をふきあがる雲
 ぞ絶えずかがやく

芋の葉の聚落を見れば月夜には面照りあかり
 人ら立つかに

草土手や月にそがひてゆく我の影がひとりな
 り袖をふりをる

垂りくらき孟宗の上へに在る月の十六いざな夜の光風
にはららく

ちよろろと光る水あり草深に田をめぐり來て

月の夜愛かたし

旱天にて田は植えずじまひになりぬ

地下水の響くをきけば月かげや銅管の蓋に聚あつ
まり光れり

風道かざなみちの光すがしき鴨萱かむかは月前ついでに見て跳ぶべか
りけり

狭霧立つ窪田のわきの草土手も月夜ふけたり
竹蕒草の花

うちかがむ毛けの柔なものの黒きかげ葱はかがよ
ふ月夜つきよ落窪おちくぼ

十七夜

照りつよく孟宗の上に立つ光十七夜の月にわ
れは正ま面と向く

十七夜の月かすめ飛ぶ雲さへや立つ秋風と繁し
にし白し

稻びかりしきりひらめく棚雲の上の空晴れて
秋は來にけり

早ひ天り夜ぞも火は氣けだちていちじるき横雲の上にさ蝸そり
座ぞが見ゆ

十七夜の月惜みをればおどろしくしろき巨おき
雲の亂れ立ち蔽ふ

八月 浅宵

藤の蔓網戸の外にうちそよぎ灯かげ緑なり夜
は透かしつつ

蝗磨網戸にとまり涼しさよ灯さしむけて我ら
夕餉食す

宵の灯を網戸にたかる蟲の翅の螺鈿きらきら
し鏤めにけり

粉をちらして網戸に翹うつ天蛾は肉厚き胴の
黝き褐色

灯にあかるみどりの網戸男童が蟲を採る顔の
外に凜々しさ

黄金蟲

野に向ふ我が家の網戸灯の點けばさうさうと
して羽蟲來襲ふ

黄金蟲うなり飛び來るこの夜ごろ雲は蒸しか
へし夕風暑し

黄金蟲網戸うちたたき音きけばすさまじきか
なや灯に狂ひける

黄金蟲銃丸と來て亂れふりこの朝見ればなべ
て死ににけり

黄金蟲朝なさな掃き亡骸の艶ふかきから瓶に
つめつつ

晝寝覺

晝寝ざめ日の照る方にうち見やる往還の埃と
ほくひもじさ

晝寝ざめまだうつつなしながめゐてしらしら
照りのをとこへしの花

晩夏白雨

いつしかと夏も去ぬらしこの眞晝雨はげしけ
れど遠空あをし

白雨の霧立ちのぼるゆふつかた孟宗むらは
火早し 燈

白日観雲

我が家は坐まながらにして観る雲の空廣らなり
野のかぎり見ゆ

坐まながらに雲の行ゆき観る晝ひるつかたみんなみの空
にかかる驚おどろあり

押し移りうしる風もつ綿雲のおのれ薄れてい
つかむなしさ

吹くからにつぎつぎと來る白雲のおのづから
ゆたに移る風向むき

風向むきに移るふ雲のまろがりは光厚うしてしる
き二塊ふたくれ

曩さきの雲いづら行きけむ今見ればさまかはる雲
の高う積みたる

仰あや向むきに眠る顔だち胸高く押し流れ行く雲も
ありにけり

楽しみと雲は眺むる夕かけを茅か蜩らのこゑの亂
れ立ちつつ

曇り日

曇り空日暮もよほす雨のまを茅か蜩らのこゑの立
ちきそふめり

雨ふり雲立ち蔽ふ森のこなた野良家ぐ組み明あし
しきり音立つ

寢室の初秋

二階より灯ひに照らしみる向ひまはり日葵ひまわりの花小ちさうし
て數無かりけり

硝子戸びやうしに白き寢臺ねたいの影うつり灯ひもうつるなり
子こらが初秋

蚊帳あしだまを吊る妻が袂たもとは寝たる子の直ただ向むかふ顔かほに觸ふ
りにつつあり

水のごと白き寢臺ねたいの下冷えていの寢ねざるらし
子こらが圓つぶら眼め

蟲の音のほそきこの夜と思ふにぞあはれ一ひと杯つぎ
の水すすりをる

秋
早

眞晝ひとり歩み來にける砂利の道に夏枯れの
田の風を見わたす

秋^{あき}早^{ひだり}防空演習しきりなり蒸^むれつくしける稗^{ひえ}の
雉子いろ

何に立つ水の音ならむ思はぬを早はげしき眞
晝にきこゆ

木
犀

夜のくだち小雨しづみてにほひ來る金木犀に
うらなづみある

遠じろき夜

月の夜は雲遠じろし野平^のを多摩川あたり森低
み見ゆ

月夜いまなにか明りて来る聲の隣びとらし通
り過ぎをり

我家を

晝の野に子らと出て来てかへり見る我家^にし
あれや白木^の権の花

野に見つつ閑^かなりける我家^や上^のてすりに
毛布干したる

秋
の
日

秋の田の早稲田の畔をゆく童ふたり見えつつ
彼方指しをる

事もなき秋の眞晝や穂に垂りて早穂田の美稲
色づきにけり

眺めつつ閑けかるかな夏過ぎておほかたの色
は秋に入りたり

田のあなた新懇道の砂利道も閑けかりけり秋
正午過ぎ

穂の薄光るあたりに眼は向けて何かをさなき
聲も聴きをり

根くづ焚く

根くづ焚く火は燃えながら搔きほけて土ばかりなる何も無き畑

根くづたく畠の火立だち色見えてうちいぶる末はしろく棚曳く

床の閒

きちかうの表見おもてせたる花ふたつ薄とりそへ妻がたしなみ

赤人のゆたに坐らす像見ればほれほれとよし眺めたまへり

ピアノ

月拂ひ二十ヶ月とよ。このピアノちゆうぶる中古ぞとよ。
 塗りみがき、うつくし黒し、大きなり室しつにそ
 びやぐ。かうがうしこのピアノ、立ち添そひて、
 蹲かかみ見て、蓋をひらき、鍵かぎたたき見て、見も
 飽あかず終ひな日もありける。貧ひなしかる我わやとも、え

は求め得ず、常とここがれ果敢はなみしもの、子こら
 が爲いめ、五十い路そ近く、やうやうと手てに入りいに
 けり。月拂ひ二十ヶ月とよ。中古の獨逸製と
 よ、眼まなこがしらのあつくなり來きる。

§

父われはピアノの陰かげにかき坐まり言こと黙もくしをり子
らぞたたける

在るべくて在るべかりにしこのピアノやうや
うにして室に光りぬ

演習の秋

秋まひる野には火花の發たつ見えて機關銃たの音
のたたたとひびけり

赤き旗稗ひの穂向むかにしきり振りとどとかなしも
駈かけきたる兵

秋の日の空氣ほがらかに駈けのぼる兵あらは
なり浄水場の道

假想敵ひたにし晝をこもらへば孟宗むらもか
なしかるべし

うち透り休戦喇叭鳴れりけりこちごちの野も
吹きつぎてあはれ

庭前秋雨

楚立つ古木の梅にふる雨のあかつきの雨の寒
くしぶけり

朝寒と小雨ながらふこの空や立枝の楚さ青に
見えつつ

いち早く諸葉ふるひし梅が枝に雀がとまり雨
のコスモス

黄の粟のいとど蒸したる女郎花も時過ぎにけ
り雨しげくふり

朝ぐもりラヂオの塔の先わたる小鳥かぎりな
しなだれ落ちゆく

或る夜の雨

誘蛾燈しろくかかぐる家のあたり秋雨の中に
なにか狂へる

鈴の音の草堤来る夜の雨閒灯をあかくつけて
胸とどろ居る

何の號外ぞや

燈火管制の夜

ラヂオ研究所灯を消しにけりうしろ立つ照明
 迅く鐵塔は見ゆ

大藏の原目にただひとつ頼む灯の明かりしか
 ば遂に消しにけり

常の夜も谷地は暗きに灯を消して物のこごし
 くいよよけぶかさ

この谷灯かけ全く無し消し棄てにふたたび
 と點けすいねにたるらし

砧村燈火管制の時過ぎて月明らけし高槻がう
 へに

隈くまふかく過すがふ夜霧を照る月のいよよさやかに高しらしつつ

ふかき霧しきりむらだつ夜あけがた月は黒くろ檜びのあたま照らしぬ

早や早やとあかつきの闇にしぐれゐる蟬のこゑこゑもをほりに近し

山茶花咲く

書齋より観て

玻璃戸透き山茶花あかく見えにけり咲きにけるかと眺めつつ今朝は

株きまろき細葉つつじの霜凍しもやまにここだくづれしさざんくわの花

葉牡丹の庭

ある朝、妻と出てあるくに、とある畠に、葉牡丹の植ゑはなしになりたるが、數多ければ殊にあはれなりき。一株はいかほどと訊けば十錢にてよからむと言ふ。さば買はむとて三十株ほどあがなふ。冬は花も無く、色も無き庭なればすべてよろしく移し植ゑて樂しむ。かほどの喜びまたとあらむや。我は足るなり。

葉牡丹よ大き葉牡丹、葉牡丹を一株植ゑ、二株植ゑ、移し植ゑ七株八株、また更に十よこ

こだく。畠より根こじあがなひ、リヤカーに山ほども積みもて來さしつ。弾き葉のあさみどりなる、内紅く紫くろき、層厚く七重八重なる、葉牡丹は大いにうれし。牡丹とも見ずや葉牡丹、値は廉きその株ながら、株立つとこの庭も狭に、豊かなり乏しともなし。我が植ゑて霜に傲れり。いかならむ雪の日や將た。この富よこれの葉牡丹、子らとこそ見め。

§

葉牡丹の冬によろしき株立は紫ふかし葉をか
さねつつ

妻よ子よわれら富みたり置き足らふ葉牡丹の
霜にわれら富みたり

野 鴨

さる人より贈られたる野鴨の一夜にして二羽ともあへな
くなりぬ。その歌。

灯映や家の夜寒をつくづくとうづくむ鴨の竝
びみじろぐ

三和士の凍きびしかも夫鳥の雄鴨死にせり雌
の鴨もいづれ

童言ふ雌鴨かなしもこれをかも長々し夜をひ
とりかも寝む

朝明待たす終夜うづくみ死鳥の雄鴨がそばに
雌鴨斃れぬ

下總や千葉の水沼になげかひし愛し野鴨を家
に死なしつ

霜 晴

大野良の一夜の霜の下り到り見る眼まばゆき
冬は菜のいろ

大霜のひと朝のいろを我は見て夜をとほし來
し今ぞおどろく

宵早く寝ねにたりける今朝起きて子らが駆け
いづる畠の大霜

鶏トリのこゑうらめづらしとあらなくに大霜の今
朝の野は澄みにける

日の出前霜はふかきをくるぐろと人立てり見
ゆ浄水池の土手

霜晴をおほに燃え立つ丘の靄ひむがしの空は
日ののぼるなり

§

霜晴の靄の氣けに立つくぬぎ原ひらちかき日の今
はあたりぬ

日あたりの枯葉のくぬぎはららかす霜晴の午ひるま
 の霨きりのしづけさ

にびねすみ雑木のすがれうちけふる霜の氣けに
 して晝はあたたか

霨きりの奥ふかくかがよふむらがりは櫟枯葉か乾
 ききりたる

しづけさたとふべきなくぬぎ原にあはれか
 がやかし一葉ちりをる

赤松の木群こむぎしづけくありにけり日のあたる
 ころ影を落して

日あたりの枯野よこぎる道あらし思はぬにし
 ろきバスの揺れ来る

思ふことみなしづかなり妻とゐて冬の日向の
露にこもらふ

冬^{ふゆ}雑^{ざふ}木の露あたたかき遠ながめ鉾杉の秀^はも群
れてこもれり

霜晴の日あたりぬくむ野の南ラデオの塔はう
ち^ち對^{むか}ひ見ゆ

日の大皇子

皇太子御生誕を壽き奉る歌

その前日

冬の晴無線の塔のいただきに水晶のごと光る
ものあり

御生れの日

霜晴のひむがしの空光立ちゆららに紅き大き
日の面

皇子ぞ今御生れましたたれ日の出疾くサイレン
はつづくまさに大皇子

國をこぞり極まる涙しづかなりかかるよき日
を待ちまけまつりき

乞ひ禱むと言絶えにける國民のいかなるきは
か涙ならざらむ

何ごとも畏かりけりこの朝や大きみ光に息づ
く思へば

皇神も見霽るかします青雲を今朝ぞうら開く
此の産御聲

産御聲玉と透らす此の國や早やうら安し勢ひ
こそ思へ

その後

ラヂオの我が祝歌はいち早し子らが歌ふこゑ
のひびき來ここに

畏きあたりを

朝光の貴く明き御産殿に國母は坐さめ御眼な
ごやかに

現あきつ神我が大君は朝に夜に通ひわたらすと皇
子こを笑あますと

大君の御笑あひ思おもへば朝ぼらけ日はさしのほり
豊とよの旗雲

再び、大皇子を

生あれましてたぐひなく坐ます此の皇子みこの我が大
皇子ぞただち日嗣の宮

朝よ夜よ肥立ひだちましまし我等が皇子あてにを
さなく笑あますとふはや

繼宮明らにゆたに坐ませりとぞ畏おそみて聞けば御
息いきづかひまで

月と星

昭和八年十二月廿日夜、上弦の月を中心に金星と土星と
 潜入す。數萬年に一度の歡會なりといふ。金星潜入、タ
 ヅチ午後四時三分四十八秒、完全潜入四時四分八秒、出
 現雲のために不明。土星潜入、タツチ午後六時三分十六
 秒。完全潜入六時三分三十六秒、同出現七時一分、完全
 出現七時一分廿秒。

上弦を食み出る圓き陰の月夜空は青し
 へりつつ

織月の縁どる黒き圓球は我が佇つ地の陰うつ
 らし

現しくもいたもかなしきこの淺夜月にふたつ
 の星潛り入る

金星は下潛りつつ月の上に土星は明し光りつ
 っ入る

月面をるぐりてくらき色見れば裏ゆく星のありと思へなくに

母と子ら佇ちてながむる西の方月も二つの星を抱きぬ

本集『白南風』は、我が第六の歌集たるべきものである。

第一は『桐の花』、第二は『雲母集』、第三は『雀の卵』であるが、第四、第五たるべき歌集は未整理の儘に、此の第六の集を刊行することになった。で、此の『白南風』は大正十年の『雀の卵』以来、約十三年ぶりの出版であるが、順位としては、間に二卷のエアポケットがあり、直後の歌風ではない。

尤も、その間に、詩集としては長歌の多くを収めた『觀相の秋』、長歌の綜合集『篋』及び短歌の選集『花檉』或は現代短歌全集中の『北原白秋集』等の刊行があり、『白秋全集』の歌集第二にも新作の一部は編入されてあるが、何れも単行の新作集でなかつた。これは別編たるべきものである。

『雀の卵』以来、現在に到る、わたくしの短歌作品は約四千首にのぼり、長歌は六十に

餘るであらう。若し分冊整理するとすれば、左の四卷となる。

第四。大正十一年より同十五年に至る作品中、小田原山莊生活を中心としたる短歌及長歌、加之、同傾向の若干の羈旅歌。及増補新作。

第五。大正十二年より昭和二年に至る作品中、羈旅を主としたる印旛沼、北信、鹽原、樺太、北海等の短歌・長歌・口語歌。及新作増補。

第六。大正十五年より昭和八年に至る作品中、天王寺墓畔、馬込綠ヶ丘、世田ヶ谷若林、砧村、此の四ヶ所に於ける、東京轉住以來の生活を主としたる短歌及長歌。

第七。昭和二年より同八年に至る作品中、木曾川、北越、奈良、北九州、滿洲、濱名、富士五湖等の羈旅、飛行等の短歌・長歌及増補。加之、今後の新作羈旅歌。

而して、本集『白南風』はその第六に該當する。なほ、此の外に時事歌として、昭和八年度に『成城學園を思ふ歌』百四十四首及び二三の長歌があるが、之等は他の機會に何かの集に編入されるであらう。

以上の四卷は、その製作順によらず、各冊各自の風懐と香色とを個々に收攬しようとするものである。で、製作の年代は交々に錯綜してゐる。

之等の内、第六を先にした理由は、最近作が多く、整理に就き易かつたからである。第四、第五の如きは、その推敲が十三年に亘つて、而も完成し得ぬ作の夥多があり、一首の中、僅かに一二首の爲に難澁する若干もあつて、之等の整理は容易ではないのである。その當初、まだ生れてもゐなかつた長男が、既に小學を卒へて中學へ進む現在に於て、つくづくと感慨の深いものがある。その間、一冊の單行歌集をも完全に整理し得なかつたわたくしであつた。ただに切抜の誌面やノートが眞黒になるばかりであつた。

§

大集『白南風』の作品數は左の通りである。

天王寺墓畔吟	短歌二百五拾貳首・長歌壹篇
緑ヶ丘新唱	短歌貳百貳拾壹首・長歌貳篇
世田ヶ谷風塵抄	短歌貳百貳拾五首・長歌壹篇
砧村雜唱	短歌六百貳拾壹首・長歌拾篇
總計	短歌千參百拾九首
長歌	拾四篇

生活年代は大正十五年暮春より昭和八年の年末に至り、製作年代は、大正十五年七月より昭和九年二月に至る、約七ヶ年半に及んでゐる。

編纂に就いては、その製作の年代順によらず、生活の次第に順じた。乃ち居の移るに従つて四章に分類し、之に應じてそれぞれに秩序を正した。前後するに必ずしも作の新舊を問はなかつた。此の際、増補すべきは加へた。一貫した整理を欲したのと、更に新

なる感興を得て、意外の多作を見たのである。

本集の編纂を思ひ立つたのは、昭和八年の初頭であつたが、その後、曾つての生活に於ける歌材の整理に於ける熱意が、わたくしをして六百首に庶い新作を得せしめ、またノートに探し求めて、未成の物をも訂正、採録せしめるに到つた。豫定以上の老成なる歌集となつたのは此の故である。

又、その作品の収録に就いても、本集は先例に反して極めて寛選である。嘗つての發表作の中、殆どは棄てず、先に述べた如く新作以外ノートの分までも加へた。ただ一首一首には丹念した。

整理を了したのは、昨八年の十一月であつた。初校のゲラ刷りが直ちに出了。而も最後の下版は本年の二月にかかつてからであつた。此の間、訂正に訂正が重ねられた。下版後紙型にまで、わたくしの不満が夥しい象眼や組み替を強行せしめることになつた。冷汗を覚えるぐらゐではなかつた。この難行には脊骨もひしがれる思がするが、推敲の苦も決して捨るべきではないのである。ただ徹すべきは飽迄も徹しなければならぬ。い

い加減のところでは放擲すべきではない。

その當時の作に對し、増補した新作の割合は、『天王寺墓畔吟』に於て、三・六倍、『緑ヶ丘新唱』に於て、四・五倍、『世田ヶ谷風塵抄』に於て一・八倍、『砧村雜唱』に於て、〇・二倍となつてゐる。

此の内、最も古い作は『天王寺墓畔吟』中の巻頭、「新居」の一、「白藤」の歌であり、最も新しい作は『砧村雜唱』中の「IV・父母の冬」の一聯である。

他の全篇に互る一々の作の新舊、製作の年代に就いては、事あまりに繁瑣に互るので茲には冗説せぬ。確實なる年表その他は後日に譲ることにする。

§

本集には四つの風景がある。時に應じて、それぞれにわたくしの生活の環境が移つてゐる。四つの章の冒頭に、簡単な解説は試みたが、更に多少の加筆が必要に思ふ。

天王寺墓畔

大正十五年五月に、わたくしは小田原の山莊から、その谷中の天王寺墓畔に移つた。河口懸海師の紹介で借りたその家は石井久太郎氏の有であつて、元は天王寺の坊中の隠居所の一つであつたらしい。廂が深く、晝もなほ仄暗いほどであつた。門は東に面し、道路を距てて直ちに石塔と向ひ、隣は左に彫刻家朝倉文夫氏のアトリエがあり、右には珠敷工の板廂が門庭の木蓮の上に見えた。その門庭には楓や百日紅、竹柏、檀、厨近くには藤、小米花、友待の空には八重の櫻も咲いた。中門から古風な奥庭へ入ると、椎垣に添つて冬青やゆづり葉が繁り、菩提樹や楓、茶室の隔ての袖垣、幾つかの大きい石、厠近くには一木の榿が秋は深い夕日に照り輝き、裏には柿の枯枝が冬は黒い帯をこびりつかしてゐた。石井氏は明治天皇の臨御になつた三條公の邸宅を買つて白鬚橋畔に之を奉安し、自もまた傍に住んだが、この家の後ろ横にも、その土蔵を移した。この土蔵が雑誌『近代風景』の編輯室となつた。

此處の生活は約一年間であつたが、朝夕の墓地の逍遙は、わたくしをして却つて明るい楽しいものに心身を悦ばせた。ただ煤煙の深いには陰鬱にされた。

詩集『海豹と雲』の中の第六章「珠敷工の夜」の中の十六篇が、此の『天王寺墓畔吟』と照應する。詩文には、「谷中の秋」「白秋の墓」「庭を眺めて」「白く輝くもの」がある。之等は『白秋全集』のⅧ「詩文集第二」に收めてある。

馬込緑ヶ丘

この近代的風景は、『白秋全集』Ⅷの詩文「緑ヶ丘風景」「緑ヶ丘の秋」「緑ヶ丘にて」「剝製の栗鼠」等に委曲が盡されてゐる。

「この緑ヶ丘は赤と緑と青の屋根の、種々雑多な建築様式の所謂文化住宅の波濤の中に突出した一つの岬である。」

曾つて、芥川龍之介君が、仰いで「これは白秋城」だと言つたこの家は、ヒマラヤ杉をあしらつて赤い瓦の屋根を尖らしてゐた。急坂に添つた石垣の上の芝土手（築地と歌

には言つたが、日本風のそれではなく、洋風の芝の土手である。を鍵の手に曲ると質素な丸木の門があり、通草が絡み、また芝土手と上の生垣が續いた。この家は或る建築師が自分の住居として設計したものであつた。簡素で贅が無く、しかも明朗で、如何にもその頭腦のよさを思はせた。庭の芝生や立木や、盆地を隔てた向うの丘、方々の丘の赤松、霧と燈火の九十九谷その他は、歌にある通りである。

その丘の、後ろが切通しになり、蒲田から大井へ通ずる貨物線が敷かれた。洗足池方面へ向ふ途次の陸橋からは、南に富士が仰がれた。そのあたりにも異人館の三四が並んでゐた。

その昭和二年暮春から翌三年の初夏に至るわたくしの生活は谷中時代とは全く相違した環境が至極快適であつた。わたくしは主として洋風の生活をし、支那服を着け、或は仕事着の豊かなガウンを着けた。芝生へはトラビスト製の素木のサボウをつつかけて下りた。風景も東洋の水墨でなく、清新な油畫のタッチであつた。歌の上の色彩も之に關連しない筈はない。ただ和室は二階に一間しかなかつた。その家に、夜ふけて月に開く

窓は開かであつた。その時折は坐つて古きを温むるわたくしであつた。

詩としては『海豹と雲』に收めた「月光の谿」の中の「緑ヶ丘夜景」等の七八篇、「童話と月」の中の「月と美童」がある。此の『緑ヶ丘新唱』と流通する。

世田ヶ谷若林

馬込から越したのは、子供たちの成城への通學の便宜を思つたからである。昭和三年初夏のことであつた。その家は赤瓦の洋館で、ポーチの上には郁子の棚が日陰を作つてゐた。邸内は廣く、離家は數寄な和風であり、石の多い幽雅な奥庭もあつた。築山の小さな祠や鳥居、赤松や本榿、楓、柏、箱根笹、つくばひのそばの土蔵、春日燈籠、通草の棚、すべて歌にある。中の生垣を隔てて、廣い芝生があり、周邊には四阿屋、竹に萬古焼の狸、鞆、櫻、楓、椎、梧桐等の立木。此の集の挿畫にある庚申薔薇の中門には眞萩や山吹がしだれかかり、その中門から門庭へ出入りができ、そこにはまた木解の植込があり、應接室の窓には八つ手や松ヶ枝が透かして見えた。自動車小舎は空になつ

て、二階には或る巡查の家族が住つてゐた。裏手には葡萄棚や壊れかけの鶏舎があり、井戸があり、金魚の池があり、白鷺鳥があさり、また山茶花や椿が咲き、小さな畠には柿が落葉し、食用菊が霜に痛んだ。

書齋は郁子の棚上の表の階上にあつたが、秋は鍵の手の壁から葛紅葉が實に明るく反射した。電線や所在の巨きい木立や、淨水池の白塔が見えた。

かう書いてくると、當時のわたくしの生活は極めて豪華なやうであるが、その家は郷里の先輩で貴族院議員であつた吉原正隆氏の死後の邸宅を、留守番代りに頼まれて、廉く借りてゐたのである。巡查氏は居附の管理人として遣してあつたのである。わたくしは容易く誤解される者の受ける苦痛をしばしば味つたが、その爲に善良で貧しいその一家族との邸内同居を斷る心にはなれなかつた。

風塵のはげしさは非常であつた。三軒茶屋から登戸への街道に面し、牛車、タンク、砲車隊等の騒音、鶯音、火山灰の旋風は堪へがたかつた。近くには陸軍の自動車學校もあつた。襤褸市で有名な世田ヶ谷の本場であつた。此處での生活は六年の初夏まで續い

た。

詩文には「新居より」「穢くして長久なるもの」がある。『白秋全集』XIII。

砧村

今も、わたくしは、この砧村の大藏の西山野にゐる。移つたのは六年の初夏である。此處に来てこの風景を散文に書いたことは曾つて無い。すべてを歌に托した。作歌にしみとうち涵つたのもこの砧村である。日常が作家生活であつたため、改めて新作を増補することも尠い。往時を追想して藝術表現に歌材を索る要も亦尠く、直に觀て朝夕に磨いた。

この家は簡素で風致があり、和にして洋、何か度ましくて、まことに田園の住居と思へる。庭は狭いが、ささやかでも芝生があり、掌ほどでも苺の畝があり、花壇もある。古木の梅、樗の若木、藤の棚、檜葉垣の向ふは植木屋の植込があり、坐ながらにして南の空に雲の去來が仰がれ、野の涯、夜の星座までが廣々と眼界にはひつて来る。門傍の

薄、萩、茶の木垣の横の電柱、白木種、或は左の書齋の前の山茶花、躑躅、沈丁、月桂樹、小さな祠。門前の道路、島、田川、狭い田の並び、萱原、色とりどりの畑の向うには竹山に高榎。東南には本村の火の見、ラヂオ研究所の對の無線塔。このあたりの盆地景情は、四時、わたくしをいかに楽しみましたか。

わたくしは本来光明の子であらうか。かうした自然の光耀の直下には、如何なる人生の悲痛も一瞬にして忘れ得る性情が抑もの本質であるらしい。自然と一枚になる時こそわたくしの最高の喜びを自身に忝とする。(昭和九年四月八日、釋迦佛誕日の夜記)

白南風 定價參圓貳拾錢

昭和九年四月十六日印刷
昭和九年四月二十日發行



著者 北原 白秋

發行者 北原 鐵雄
東京市神田區神保町三丁目一三

印刷者 西川喜右衛門
東京市神田區小川町二ノ二二

印刷所 秀工社
東京市神田區神保町三丁目一三

發行所 アルス

電話 二四八八番・電報 二二七五
東京

北原白秋著

白秋年纂
一九三三年版
全貌

(最新刊)

北原白秋編

鑑賞
指導
兒童自由詩集成

(最新刊)

新刊白秋文集
菊年文
判纂五
酒第一
佛輯二
蘭一
西九
綴三
函三
入三
美年
本一
版一

菊特本
判製文
豪華五
華目百
特ラ八
製フ十
本紙六
美紙六
函使一
入用一

本書は其の題名の示す如く著者北原白秋先生の全集を餘すところなく集録發表せる一九三三年度の全作品年譜である。即ち詩、短歌、童謡、小唄、民謡の類は勿論、國民歌論、散文に於ける詩文、評論、隨感、隨筆、研究、詩業としての選作品に到るまで一切のもの、第一義の作品より二義の餘技の全分野に亙り、其の陰影を定めます所なき著者の風采の萬華鏡である。又定型的短歌の古典的嚴守者として、奔放活潑なる自由詩人として、又新民謡、新童謡、兒童自由詩の開拓者として、日本の誇るべき詩家北原白秋先生の綜合的、管絃樂的に奏鳴せる先生の全風貌を愛慕欣容する人々に取つて、本書の公刊こそ史的にも亦光輝絢爛たる一大文獻集である。

童謡の慈父として、自由詩の慈母として、其の開拓と指導とに於て、生みの親たる白秋先生はどの絶大な愛を以て、守持し希求する者は日本に先生たゞ一人である。新童謡が十分に開花し、兒童自由詩の教育が全國に普及したるは全く先生の藝術良心を傾倒せる獻身的事業の精華の結果として、其の偉績の前に滿腔の感謝を捧ぐべきだ。本書は十六年間に亙る「赤い鳥」の自由詩作品と選評とを集大成して、詩史的に鑑賞指導兒童自由詩集成」を以つて一書となせるもの、かの誌に於ける自由詩の一大記念塔にして、其の開拓の精神と運動の全貌を示せるものにして、國語科教員諸氏に取ては特に得難き文獻資料にして、今後の鑑賞指導の羅針盤である。

定送 價料 壹拾 八圓 錢 拾 貳

定送 價料 參圓 拾 五 錢 拾 五

書・歌・詩・の・ス・ル・ア

北原白秋著

抒情詩集 思ひ出

(増補新版)

菊彩色本
半カ度二
表入ト四
紙上・八
麗印質上
装刷印質
極紙刷印
美用紙刷
本デ一ベ

「思ひ出」の第一版は明治四十四年六月の刊行である。其の印象的な新しい感覺表現は日本詩壇に劃世的の驚異として天下の賞讃を集めた。長篇の序文「わが生ひたち」はその驚くべき鮮新典雅なる官能的描寫に於いて全く人々を魅了し、「思ひ出」の巻は忽ち疾風の如く全國青年の間を駆け巡る如く崇敬され、著者の郷土水郷柳河は時ならぬ巡禮の群れに賑はされ、爾來版は百版に餘り、古典的の權威をその光輝に惹き大なるを加へ、更に當時の作品四章三十六篇を追補されたのが一九二五年である。その後版を絶つこと久し、世の翹望やみ難く茲に初版通りのかの懐しき骨牌の女王の裝幀にて一九三三年版を刊行し廣く愛好者の座右に推すものである。

定送料 八 價料

北原白秋著

抒情歌集 桐の花

(翻刻新版)

三彩色本
五原二文
刊畫度
著葉三十
自葉三四
畫插・葉
装畫・葉
瀟瀟十二
美酒入箇
本入箇

歌集「桐の花」の瀟瀟にして清新なるかの俳諧西藝術の懐しき手觸を思ひ起さしむ。而も此獨特の官能は繊細なる近代の感覺と相俟ちて、微かに草木昆蟲及移り行く季節と心の息づかひをたづね、ある日の素朴なる情緒はゆるせなきに神の韻へに交りて自ら歌本來の哀しき氣まにす。なかる。されば外國人の感觸に吹き鳴らす日本の笛の音色の假初の病に喫む古き三鞭酒の味より尙新しく、薄荷の飲きより尙懐ましく爽かなり。收むるに新聲三百餘首、單に自然の推移に任せて「春」「夏」「秋」「冬」「心」の五章とし、「桐の花とカステラ」以下 ESSAY 五篇等板を絶つ事久しく、茲に新たに板を起し舊來の面影を其儘寫し、廣く、愛好者の座右に推す。

定送料 貳拾 價料

書・樂・音・の・ス・ル・ア

小松耕輔著

西洋音樂の知識

(改訂増補十八版)

六繪口
判葉八
銀插葉
美圖插
裝畫・葉
入函二
餘八十四
頁八十四

ラヂオにレコードに西洋音樂の素晴らしき隆盛を見よ！今や近代人の常識として西洋音樂の十分な知識は絶対に必要である。本書は全くの初歩者に向つてその全知識を平易詳細に解説せるものにして、學理的にも實際的にも歴史的にも間然する所なき名著である。歌劇を見る時にも音樂會にレコードにラヂオに聴かばならぬ好伴書に接する前には是非一度は開かねばならぬ好伴侶として本書の必讀をおす、めしてやまない。

定送料 貳拾 價料

小泉 洽著

詳しい樂譜の読み方

(改訂三版)

六原色
判一版
製葉一
酒圖插
函二
入函二
〇五二
頁六十九

西洋音樂の第一歩は樂典の完き修得に始まる。樂譜の正しき理解と知識なくして音樂藝術を味にすることは出来ない。本書は音樂の實際教育家として長年の體驗を有せる著者が、從來難解視された、あるひは簡単に過ぎた樂典書に一新生命を拵けるもので、その解説の周到にして懇切を極む、誰れにも直ぐ修得出来る樂典の實際的指導書である。中學校、女學校の教科書としてまた受験の參考として無二の好伴侶である。

定送料 壹拾 價料

服部龍太郎著

レコードの選び方と聴き方

(改訂増補六版)

四插本
判百三
特三三
製八十六
美個八
入函二
入函二

最近西洋音樂の普及とともに蓄音器によるレコードの鑑賞者は激増した。本書はこれに對する藝術的の指導と解説を與ふるもので、レコードの選び方と手入、蓄音器の選擇と手入を始め、盤上に躍る大演奏家四十名に對し、傳記を附し、愛盤三十題、音樂鑑賞十二題、五十名曲の解説、洋樂名曲一覽表を附す等レコードによる西洋音樂全般に對し周到懇切なる知識を網羅せるもので西洋音樂愛好家の必讀すべき指針書である。

定送料 貳拾 價料

